

国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注(1)

劉 玲

国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』は、一九七七年に勉強社により影印出版され、中田祝夫編抄物大系に収めている(以下この影印本を指して「幻雲抄」ということがある)。幻雲抄は、江西竜派・希世靈彦・桃源瑞仙など五山僧二十余人の三体詩の所説を五山僧の月舟寿桂(号は幻雲、一四六〇～一五三三)が集成し、その弟子継天寿敏が整理・補記して大永七年(一五二七)に成った、いわゆる「集成抄物」である。日本に伝わった三体詩のテキストとして、古本(季昌注の三卷本)・天隱注本(二卷本)・新本(天隱注に裴虞注を加えた三卷本で、増注本ともいう)の三つあるが、幻雲抄が原典としたのはそのうちの**新本**であり、日本で最も流布したテキストとされる。なお、幻雲抄はその原典全巻でなく、巻一に収めた七言絶句総計一七二首のみにについての抄である。その他、幻雲抄の書誌・異本・成立など詳しい事情については、影印本の巻末に付す坪井美樹氏「解説」を参照されたい。

幻雲抄は次の三点からすぐれた資料となると坪井美樹氏同「解説」に指摘している。つまり、(ア)大永七年(一五二七)成立後間もなく天文五年(一五二六)の書写であること(五山で三体詩の注釈が多く作られたが、現存する室町時代の古写本は少ない)、(イ)五山における三体詩研究の集大成であり、三体詩解釈にも資することである、しかも当時の師説伝授の様相・学問の動向を窺う好

資料であること、(ウ)仮名文・漢文ともに多くの抄文を含み、中世後半の国語資料として利用価値の大きいこと、の三点である。一方、幻雲抄において、ほとんど毎頁に漢籍の引用が見られるということが注目される。例えば、原典の巻頭部にある季昌序について、幻雲抄では、「序」の字の解釈として(一)「養私義」(月谷養雲の説)と(二)「幻本之義」(幻雲の説を掲げているが、線に見るように、そこに実際「尚書」(中華書局影印『十三經注疏 尚書正義 中華書局一九八〇年)と「韻會」(『古今韻會舉要』中華書局二〇〇〇年)の内容をほとんどそのまま引いている)ことが確認される。

(一) 序字 尚書序 正義曰、序、言序、述尚書起、記存亡、註説之由、毛詩傳曰、序者、緒也、則緒述其事使理相、胤續、若爾之抽緒、養私義(四七一～二)(四七一～二)は影印本の四七頁一行目～二行目を意味する。以下同様

(二) 以下幻本之義

序 韻會 叙字註 説文 叙 次第也 尔雅 叙 緒也、孫炎云、端緒也、通作序、正義云、序叙首義同、舉其綱要、若爾之抽緒、亦通作緒、又序字注、説文、東西牆也、徐曰、按書傳所以序別内外也、四七三～五

こうして引かれた漢籍は、幻雲抄全巻にわたってほぼ二六六種あり、一頁あたり三箇所も見られる。しかも、経・史・子・集の合

わせて計三十三ジャンルつまり『四庫全書』の三分の一のジャンルに分布している。それだけでなく、漢籍の引用は抄本文に見られる場合が多いが、書入れや原典の本文の行間に書き込まれた抄文にも見られる。更に、書名の記し方や引用形式などともたいへん複雑である(以上は拙稿『二体詩幻雲抄』を通してみる室町時代における漢籍流布の状況¹⁾、京大大学国語国文学会『日本語と日本文学』五五号に掲載予定において述べている)。従って、幻雲抄を解説する際、どこがどの漢籍の引用かに十分注意する必要がある。また、そうした漢籍の引用は、(1)(2)に見るように誰か一人の説でなく、幻雲を含め多数の学僧の説に見られるので、注意を払わなければならない。

本稿では、主として、以上に述べた幻雲抄に引かれた漢籍、及び幻雲抄に集成している五山僧の諸家に注目し、それをできる限り明記して、幻雲抄を解説する際の手がかりになるようつとめる。以下、その他翻刻・校注上の諸事項をまとめて説明しておく。

一 前記の影印本を翻刻の際の底本とする。

一 翻刻の範囲を底本の二頁から八〇頁とし、題箋のある頁から原典の序文に関する抄が終了するまでの部分を含む。なお、基本として、方形の枠線の後に置かれる抄文の部分に翻刻するが、若干枠線内及び枠線外の周辺に書き込んだ小文字書きの抄文については、配列しにくく、かつ影印本で判読しにくい箇所が多いため、翻刻しない。また、枠線内に置かれる原典の本文については、その所在のみを示し、特に翻刻しない。原典本文の翻刻については漢文大系第二巻所収、服部宇之吉校訂『増注三体詩』(富山房昭和十三年増補)を、訓み下し文については國譯漢文大成・文学部第六巻『二體詩』(國民文庫刊行會大正十年)を

参照されたい。

一 漢籍の引用

・ 漢籍の引用が見られる場合、(1)(2)に見るとおりにその書名(篇目名や章節名の場合を含む)に線で記す。中には、四七七「毛詩」、四九一八「文選」などのように、その漢籍から特に文章を引かず、書名のみ記され場合も含む。なお、(1)「毛詩傳」、(2)「説文」・「尔雅」などのように、それぞれ「尚書」と「韻會」の中において引かれたものについては、対象としない。ただ、漢籍の引用については、今回主として「中央研究院漢籍電子文獻瀚典全文檢索系統」(<http://hanji.sinica.edu.tw/>)、「国学宝典」(網絡版(<http://www.gxbd.com/>))、「中国基本古籍庫」(黄山書社出版)によって検索することにし、一々原本で確認するに至っていない。

・ 漢籍を引用する際に、その書名が(1)(2)に見る「尚書」「韻會」のように、その引用文の前に置かれる場合が多い。若十、四七九や四八二・三に見るように、引用文の後に書名の「詩法源流」や「礼記正義」が置かれる場合も見られる。

・ 漢籍の書名を明記していないが、次のように朱意の著作から引いた場合、その開始部分に線で記す。

(3) 三百云々 朱意曰 史記云 古者 詩本三千餘篇 孔子去其重 取其可施於仁義者三百五篇(四八七)

一 幻雲抄に集成している五山僧の僧名については、(1)(2)に示すとおりに線で記す。なお、僧名の示し方については、坪井美樹氏同「解説」による。

- 一 漢字については、底本の形態を重んじ、異体（略体・俗体を含む）の文字をそのまま写す（末尾「異体字一覧」に掲げる）。そのまま再現できない場合は通行体に改めるが、一々断らない。なお、一部誤読を招きやすい、または誤字と思われるものについては、「一」内に「鉛」（六七六）のように通行体の文字を（「一」内に入れて記す）ことがある。また、若干□で示し、「一」内に「弔*文」（五一一六）や「珣*石」（四八八三）のように示す場合があり、*印はその二字を左右で組み合わせた文字を、+印はその二字を上下で組み合わせた文字を意味する。
- 一 仮名については、「子」を「ネ」に改める。また、合字では、「々」を「シテ」に、「」を「コト」に改める。
- 一 踊り字については、漢字の場合は「々」に、仮名の場合は「ゝ」に統一する。なお、仮名二字以上の場合は、「シカシカ」のように繰り返して写す。
- 一 振り仮名、濁点は、そのまま写す。
- 一 返り点と一・二点は、それぞれ「レ」と「二」のように記す。
- 一 転倒符、書入れ指示、挿入符については翻刻できず、「一」内において説明する。また、見せ消については■で示し、「一」内において説明する。
- 一 その他
 - ・ 頁数は底本のそれに従い、漢数字で記す。また、あらたにアラビア数字で行数を記す。一行あたりの字詰めは底本の体裁をできる限り反映させる。
 - ・ 句読点は特につけず、底本の朱点により一文字分をあけることとする。なお、墨汚れなどで判明できない場合、校注者

の判断による。

- ・ 破損や不鮮明箇所について判読できない場合、□で示す。判読可能なものがあれば、それを□の中に入れる。
- ・ 小文字書きの部分については、底本のとおりに写す。
- ・ その他の説明事項があれば、「一」に記す。

一 白紙の題簽【書名が記入されていない。右下に内閣文庫の図書整理票が貼られている。】

三 綱目

實接

- ・ 華清宮
- ・ 宮詞
- ・ 吳姬 已上共三首
- ・ 鼎雁
- ・ 逢賈島
- ・ 江南春 已上共三首
- 共六篇
- 総計一百七十一首

五 唐三體詩註綱目

卷之一	絕句體	實接	用事	後對	側體	卷之一	七言體	四實	四虛	六	前虛後實	結句	前實後虛	卷之二	五言體	四實	前虛後實	一意	起句	結句	詠物	唐二體詩註綱目	終	七	唐分十道之圖
		虛接	前對	拗體			欠																		

八	唐高祖開基圖	九	唐地理圖	一〇	求名公校正咨目	一一	諸家集註唐詩二體家法諸例	一二	唐世系紀年	一三	一七	四三	三體集一百六十七人【三体詩詩人の履歷】	四四	四六	「詩自三百篇以還」から「季昌書」【季昌序全文】	四七	1 序字 尚書序 正義曰 序 言序 述尚書起 記存亡註說之 由 毛詩傳曰 序者 緒也 則緒述其事 使 理 相胤 續 若 蘭 之 抽 一 緒 養私義
---	--------	---	------	----	---------	----	--------------	----	-------	----	----	----	---------------------	----	----	-------------------------	----	---

- 3 以下皆幻本之義
- 4 序 韻會 叙字註 說文 叙 次第也 尔雅 叙 緒也 孫炎云 端緒也 通作序 正義云 序叙首義同 舉其綱要 若
- 5 蘭之抽絲 亦通作緒 又序字注 說文 東西端也 徐曰 按書傳所以序別内外也
- 6 季昌序 村云 三段也 詩自以下一段 然其以下一段 或曰以下一段也
- 7 蘭譜 天英云 此兩篇叙 学毛詩序 後篇叙專学毛詩序 幻
- 8 詩自——旧抄 詩權輿於擊壤康衢之謠 演迤於卿雲南 風之歌 制作於國風雅頌三百篇之體 此詩
- 9 道之天原也 以調法源端之語
- 10 詩有「二三訓」 以下旧抄私說也 承也 持也 志也 作者承「二君政之善惡」「一述」「二己志」「而作「レ」詩 持「二人行」「一使「レ」不「二失墜」「二也 故一名而有二訓也
- 11 故云 忠規切諫 救世之針藥也
- 12 韵會 詩 說文 志也 志發於言 从言寺声 釈名 詩之也志之所之也
- 13 尚書 舜典 詩言「レ」志 歌永「レ」言 註謂 詩言志 以導之 歌 詠其義 以長「二其言」「一也
- 14 事文類聚別集第十曰 詩訖于周 離騷訖于楚 是後詩人流為二十四名 賦 頌 銘 贊 文 誄 箴 詩 行 詠
- 15 吟 題 怨 歎 章 篇 操 引 謡 謳 歌曲 詞 自操而上下八名 皆是起於郊祭 軍實 吉凶 苦樂 由詩而
- 16 下九名 皆屬事而作 虽題號不同 而采謂之詩 元稹集
- 17 玉屑十三 晦庵云 三百篇情性之本 離騷詞賦之宗 學詩而不本於此 此亦淺矣
- 18 玉屑十三 若溪論四始六義云 四始者 言風賦雅頌之四種 六義 則凡詩中皆有此六義也 一曰風 非國風之風 五
- 19 曰雅 六曰頌 非大雅小雅之雅 商頌周頌之頌也 詩固云風 風也 教也 凡風化之所繫 皆風也 賦者 鋪陳其事
- 20 比者 引物連類 興者 因事感發 雅者 陳其正理 頌者 美而祝之
- 21 玉屑第一 風雅頌既亡 一變而為離騷 再變而為西漢五言 三變而為歌行雜體 四變而為沈宋律詩 見「頌」見「消」
- 22 五言起於李陵蘇武或云枚乘 七言起於漢武柏梁 四言起於漢楚王傳韋孟 六言起於漢司農谷永
- 23 三言起於晉夏侯湛 九言起於高貴鄉公 言魏文帝樂府詩也 古抄云 八
- 24 南風之歌 養按 事文類聚續集二十一卷引家語曰 舜彈五弦之琴 造南風之詩曰 南風之薰兮 可以解
- 四八
- 1 吾民之愠兮 南風之時兮 可以阜吾民之財兮 故德如泉 流至千今 王公大人 述而不忘 行頭より右傍に小文字書きで「十八史」南風之薰兮——可以阜吾民之財兮 時景星出 卿雲興 百工相和而歌曰 卿雲爛兮 禮漫々兮 日月光華 且復旦兮」と書き込まれている。また、「阜」左傍に「アツクス ユタカニス」とある。】
- 2 養按 帝王紀云 伏羲之後 女媧氏 女媧氏没 次有「二

- 大庭氏「二」鄭玄以^{ヲモエテ}大庭氏は神農之別號 見于「養按」
真上に「二」3行目「三按十八史」に「三」とあるが、「二」
は見えない。」
- 3 礼記正義序 三 按十八史 伏羲之後 女媧没 有共工氏
大庭氏
- 4 舜典 孔傳曰 詩言「レ」志以導^{ミテ}之 歌詠「二」其義^ヲ
「二」以長^{カス}「二」其言「二」
- 5 事文類聚別集第九詩部曰 四言之始 帝庸作^{モンテツクリテ}「レ」歌曰^ヲ
勅「二」天之命「二」惟時^{キリシ} 惟幾^{キヤクセヨ} 乃歌曰 股肱^{ココク}
喜哉^{ヨロコボスベキ} 元首起^ヲ 哉 百工熙^{ヒロマル} 哉 養謂^{ヤウイフ}
益規第五之文也 類聚作舜典 恐不可平
- 7 三百云々 朱意曰 史記云 古者 詩本三千餘篇 孔子去其重
取其可施於仁義者三百五篇 愚案
- 8 三百五篇 其間亦未必皆可施於仁義 但存其實 以為警戒耳
- 9 旧抄 夫詩權輿於擊壤康衢之謠 演迤於卿雲南風之歌 制作於
國風雅頌三百篇之
- 10 体 此詩追之太原也 謂因嫺嫺 然後 自三字至九字 各作
之 三字詩始「二」後漢崔駰「二」四字始「二」於漢
- 11 韋孟「二」五字始於「二」漢李陵「二」六字始「二」於宋沈宋「二」
七字 始「二」於魏夏候湛「二」或云 王駿藻代也 八字始「二」於
「五字於始」字「於」間に挿入符あり、「始」右傍に転倒符あ
る。「五字始於」にすべき。」
- 12 魏文帝「二」九字 始「二」於陸機^{ハカラス}
「二」 舞典云 詩言「レ」志^{ハナカラス} 歌永^{トクシヘバ}
律和「レ」口^{ハナカラス} 八音 克諧 無^{トクシヘバ}「二」相奪^{フゴト}
- 13 舞典云 詩言「レ」志^{ハナカラス} 歌永^{トクシヘバ}
律和「レ」口^{ハナカラス} 八音 克諧 無^{トクシヘバ}「二」相奪^{フゴト}
- 「二」倫「二」神人以和^{デク} 正義曰 作詩者「口」箇所とも「士
巴」^{（声）}以下同様な場合がある」
- 14 直言^{ミコト}言^{ミコト}不「レ」足以申「二」意 故長歌之 令歌詠 其詩之義
以長其言也
- 15 毛詩序云 詩有六義焉 一曰風 二曰賦 三曰比 四曰興 五
曰雅 六曰頌 上以風化下 々々以風刺上 主文而諱^{テハ}
- 16 諫 言^{ミコト}之者无罪 聞^{ミコト}之者足「二」以戒「二」 故曰風 至^{テハ}于
王道衰 礼儀廢 政教失 國異「レ」政 家 殊「レ」俗 而變風
變
- 17 雅作矣 国史明「二」乎得失之迹「二」 傷「二」人倫之廢「二」 哀
「二」刑政之苛「二」 吟詠「レ」性情 以風「二」其上「二」 達
「二」於事變「二」 而懷「二」其旧
- 18 俗者也 變風發「二」乎情「二」 止「二」乎礼義「二」 發乎情
民之性也 止乎礼義 先王之澤也 是以一國之事 繫一人之本
謂「二」之風「二」 言「二」天下之事「二」 形「二」四方之風
「二」 謂「二」之雅「二」 々々者正也 言王政之所由廢興也 政有
「レ」大小 故有「レ」小雅焉「二」刑 見せ消
- 20 有「レ」大雅焉 頌者 美「二」盛德之形容「二」 以「レ」其成功
告「二」於神明「二」者也 籥 沢灼反 樂器 似笛 刊【四
八22「鼓籥之器」に「籥」字が見える】
- 21 訓 正義注云 大庭 軒輶皆疑其有詩者 大庭以迄 漸有示
器 々々之音 逐人為詞 則是為詩之漸【三】右傍に「樂歌」
故疑有之也 大庭有鼓籥之器 黃帝有雲門之樂器 至周尚有
雲門 即是詩也 於舜世 始^{ハナカラス}
- 22 見詩 云々 虞書曰 詩言「レ」志^{ハナカラス} 歌永^{トクシヘバ}「レ」言^{コトヲ}

声、依「レ」永律和「レ」声、然則詩之道、放於此乎、其注云
内則說負子

四九

1 之礼云 詩之言 承也 春秋說題詞云 詩之為言 志也 詩緯
含神務云 詩者 持也 所以持人之行

2 使不墜故也 内則曰 詩 負之 注 詩承也

3 愚案 大庭軒轅之世有詩意 無詩意章

4 唐有天下二百八十九年 二十帝 有一女主 三休詩作者百六十
七人【者】「百」間に挿入符あり、右傍に「二」。二百六十七
にすべき】

5 石林詩話云 晉魏間詩尚未知声律對偶 陸雲相謔之辭 所謂日
下荀鳴鶴 雲間陸士竜

6 者 乃正為的對 至於四海習聲韻 弥天歌連安之類不一 養
按 唐音 自武德以下 唐音名【唐 見せ消。】

7 氏目錄 所載也 蓋王績皇甫實島等之語無之

8 至唐云々 案 楊士弘唐音 自武德高祖至天宝末 得六十五人
為唐初 盛唐詩 以王績等為最矣 自天宝

9 至元和憲宗間 通得四十八人 為中唐詩 以皇甫冉為最之矣
自元和至唐末 通得四十九人 為晚唐

10 詩 實島為之最矣

11 玉海 二十四 堯康衛 列子堯 微服 遊「二」於康衢「二」康
莊之衢 聞「二」兒童謡「二」曰 立「二」我蒸民「二」 莫匪

「二」尔極「二」 不「レ」識不「レ」知 順「二」帝之
則「二」 十八史云 有老人含哺鼓腹 擊壤而歌 日出而 作 日入而

息 擊壤而歌 耕田而食 帝力何有於我哉

13 列子仲尼篇 治「二」天下「二」五十年 不「レ」知「二」天下
治 敗 不「レ」治 敗 不「レ」知 億兆之願「レ」戴「レ」

己 敗 不「レ」願「レ」戴「レ」己 敗 願問「二」左
14 右 々々不「レ」知 問「二」外朝 々々不「レ」知 問「レ」在

「レ」野 々々不知 堯乃微服云々 帝之則 堯喜 問 日 誰
教「レ」「二」尔「レ」為「二」此言「二」

15 董兕曰 我聞「二」之大夫「二」 問「二」大夫「二」 々々曰
古詩也

16 嗣子安次三休家法序 乃豫章張顓所作也 顓序云 詩之音律
自三百篇後 至唐寢盛 後世罕

17 詩者 多以唐為法 云々 幻謂 顓模季昌者也
養雲講云 周詩ハ 凡三千餘篇 孔子改為三百五篇 其說見

18 于文選十九也 補亡之詩 六篇 拾計三
19 百十二篇也 今謂三百篇者 舉大數者也 猶教家所謂小在屬

無者乎 至唐 詩ハ至唐盛也
20 又三經 謂風 雅 頌 蓋具體之一定也 三緯 謂賦 比 興

蓋其用之不一也 蔡寬夫詩話云 秦漢以前
21 字書未備 既多假借 而音無反切 平側皆通用 如雲慶卿雲

皐陶咎繇之類 大率如此 詩 瞻 彼「二」如雲慶卿雲「二」如「雲」
間に挿入符あり、「慶」右傍に転倒符ある。「如慶卿雲」にすべ

き【「瞻彼」右傍に書入れ指示あり、「雄雉篇」とある。】
22 日月 悠々 我思「道」之云「遠」 曷「云」能来

燕々于飛 下「二」上 其音「二」之「子」 飯 遠送「二」
于南「二」 思片来 音与南「燕々于飛」左傍書入れ指示あり、

「燕々篇」とある。」

五〇

- 1 皆以爲協聲 魏晉間此体猶在 劉越石 握中 有白璧 本自荆山 璆 惟 彼大公望 共此清 演叟 潘安仁 劉 劭。以下同様 〔一〕壁 右傍に「文選作懸壁」〔一〕共此 右傍に「選作昔在東注 平声」
- 2 位 同 〔二〕單父 邑 〔一〕愧 無 〔二〕子賤 歌 〔一〕豈敢陋 〔二〕微 官 〔一〕但恐 忝 〔レ〕所 〔レ〕荷 是也 自齊梁後既拘以四声 又限以音韻 〔一〕宮 見せ消
- 3 故大率以偶儷聲病爲工 文氣安得不卑弱乎 洵隱前集 一 養考之 謂齊梁ヨリシテ 韵ヲタハスン
- 4 協韻 忝 〔レ〕所 〔レ〕荷 濟 曰 豈敢以此官爲微小 但恐辱負荷之任也 養謂 荷字 芙蓉時 平下 歌韵也 負荷 〔時〕「平」間に挿入符あり、下 右傍に転倒符ある。「芙蓉時 下平」にすべき。〔一〕負荷、〔荷 真下に挿入符あり、右傍に「時」。「負荷時」にすべき。〕
- 5 上声 舒韻 養云 至 〔レ〕唐テ 声律比肩備ソ 魏晉マテシカシカナキガ 今唐韵律矣 協韵ハ 来与之 南与音ノ如也
- 6 今人 旧抄 今人指元朝也 詩法源流 唐人以詩取士 故詩莫盛於唐也 文式 莫至道曰 範德機得杜工部
- 7 之骨 楊仲弘得杜工部之皮 虞伯生得杜工部之肉 揭曼碩 非李非杜 自成一家 幻謂 元人以唐 〔揭〕左傍に書入れ指示あり、〔起計 起竭 渠列三切〕とある。〕
- 8 爲法者 此數公平 或云 今人指宋朝以下詩人也 唐

詩蓋——〔行末左傍より「蓋ハ疑言也」とある〕

- 9 華本 玉屑十一 方子通纂誌云 唐詩 有 〔レ〕八百家 子通所 〔レ〕藏 有 〔レ〕五百家 今則不 〔レ〕見 可哉惜 〔可哉惜、可〕「哉」間挿入符あり、〔哉 後に「惜」とある。可惜故にすべき。〕
- 10 四庫云々 藝文志 自漢以來 史官列其姓氏篇策 以爲六藝九種 七畧 至唐始分四類 曰 經 史 子 集 而藏
- 11 書之盛 莫於開元 其着錄者 五万八千四百六十九篇 玄宗南京各聚書四部 以甲青 乙半青半赤 〔於「開」間に挿入符あり、右傍に「盛」とある。「莫於盛開元」にすべき。〕〔一〕赤 後に挿入符あり、左傍に「丙純赤」とある。〕
- 12 丁半赤半白 爲次 列經 史 子 集 四庫 其本有正有副軸帶帙籤 皆以甲乙丙丁之色 別之
- 13 唐 經籍志 甲 乙 丙 丁 四部書 各爲一庫 御書經庫紅牙籤 史書庫錄牙籤 子庫碧牙籤 集 〔録牙籤、録〕右傍に「恐綠乎」とある。〕
- 14 部白牙籤 以別之 籤章簽 見于韓文第七 挿架三万軸之註 養考之
- 15 華本云 四庫之目 旧註 藝文志云 自漢以來 史官列其姓氏篇 以爲六藝 九種七略也 至唐始分四類 曰經史子 〔策〕見せ消 右下に「第」。「篇第」にすべき。〕
- 16 集 藏書之盛 莫盛於開元 其着錄者 五萬八千四百六十九篇 嗚呼 可謂盛矣 藝文志云 玄宗兩都
- 17 各聚書四部 以甲乙丙丁爲次 列經史子集四庫 其本有正有副軸帶帙籤 皆異色以別之也 祿山

- 18 之乱 書簡不藏也 至文宗之時 鄭置進云 經籍未備 詔(二)秘書閣(一)搜(一)訪 於是四庫之書復全也 藝文志云
- 19 薛稷知集庫也 馬懷素知經庫也 沈佺期知史庫也 武平一知子庫也 通曰 四庫之書也 太宗貞觀中 魏證廣
- 20 世南顏師古為秘書監 請求天下之書也 景龍文館記
- 21 古抄 經史子集者 經六經之類也 史官宣筆削之類也 子莊子列子楊子布子韓子之類也 集亦有類也
- 22 補云 數百家ハ大教也 雖不尽——兩義也 言 數百家ニテアルホトニ 四庫目錄ニハ 雖不尽載之 其所不
- 23 載者モ 猶繁多ニテ 後學者往々不見之ホトニ 撰詩集也 一義云 數百ノ詩人ナレハ 尽ハ 四庫目錄ニハ 不
- 五一
- 1 載トモ 目錄ニ 纔ニ 載セタ ハカリノ 詩タニモ 猶繁多ニシテ 後學者可(按)披閱 況其所不載者乎 故ニ 拔其
- 2 尤 スクナク ナシテ 撰詩集 則後學便干披閱也 蘭解同
- 3 第一解 而雖字難解 幻謂 第一 解為優也 幻謂 先賢字与今人字相應也
- 4 古抄 先賢指周伯明 姚合 韋莊 殷璠 高適之教輩也
- 5 三体四体——幻云 裴庾家法諸例ニ 詩多 且格式最明 故首於諸集 又云 裴庾家法諸例 唐
- 6 賢 履歷ニ 三体四体一妙 並以詩之次第為先後 佗集重名類之於前 明該已見其集 其餘則列【佗(他)】
- 7 於後 遂不復依次 間有未詳 姑俟明哲 幻謂 推之 則四体一妙亦註之乎
- 8 四体極玄 古抄 四体集 極玄集 各一卷 姚合所集也 二十三家也 幻按 履歷 姚合選唐詩二百
- 9 首 名極玄集 又按才子傳 姚合選集(二) 王維相詠等一十八人詩(一) 為レ極玄集一卷 序稱維等 皆詩
- 10 家射鵰手也 又據古人詩聯叙其措意 各有軀要 撰詩例一卷 今並傳焉
- 11 幻謂 才子傳 履歷 無姚合選四体集之事 不審
- 12 士弘 唐音序云 余自幼喜讀唐詩 每概數不得詩君子之全詩及觀諸家選本 載盛唐者 独
- 13 河岳英靈集 然詳於五言 畧於七言 至於律絕 僅存一二極玄 姚合所選 止五言律百篇 除王維
- 14 祖詠亦皆中唐人詩 至如中興間氣 又玄才調等集 雖比唐人所選 然亦多主於晚唐矣 王
- 15 介甫百家選 唐除高岑王季羣家之外 亦皆晚唐人詩 吹萬以世次為編 於名家 頗無遺
- 16 漏 其所錄之詩 則又駁雜簡畧 他如洪容齋 曾蒼山 趙紫芝 周伯 陳德新諸選 非【口(明)父(文)】
- 17 惟所擇不精 大抵多畧於盛唐而詳於晚唐也 至正四年八月朔日 後字襄城楊士弘謹誌
- 18 後客童貢得劉愛山家諸唐初盛唐詩 手目抄錄 日夕涵泳 於是審其音律之正變 而擇其
- 19 精粹 分為始音正音遺響 總名曰唐音 凡十五卷 共詩一千三百四十一首 云々
- 20 又玄 旧抄 又玄集 三卷 三百首 韋莊所集也 幻按 才子傳 韋莊嘗選杜甫王維等 五十二人詩

21 為又玄集 以續「二姚合之極玄」
22 衆妙 旧抄 衆妙 二妙 英靈集 殷璠所集 英靈集者 盛唐詩也 詳於五言 略於七言 至於律絶 僅

五一

- 1 存二也 蘭云 又玄 衆妙 二妙 三集 韋莊所編 各百篇 按計三百篇 英靈集 殷璠所編 上下二卷
- 2 幻謂 殷璠等所編 未見出 不審 英 殷璠編之 見干次「出」不「間」挿入符あり、右傍に「処」。「出処」にすべき。
- 3 英靈 幻按 履歷 常建肅代時人 殷璠河岳英靈集云 常建倫於尉 云々 華英靈集殷
- 4 璠所編 實也 又洪駒父詩話云 丹陽殷璠撰河嶽英靈集 首列常建詩 愛其山光悅鳥
- 5 性 潭影空人心之句 以為警策 云々 漁隱前集二十
- 6 英靈 幻近得河岳英靈集 其集上下二卷 題号云河岳英靈集 其次行云 唐音詩 唐丹
- 7 陽進士殷璠集 上卷則常建詩十五首為始 賀蘭進明詩七首為終 下卷則崔曙詩
- 8 六首為始 閭防詩五首為終 又目錄載「二 橫六行 豎十三 者」云 切見詩之流傳于世 多矣
- 9 若唐之河岳英靈中興間氣 則世所罕見焉 本堂今得此本 編次既富 挑摘又精真 詩
- 10 中無價玉也 敬錄諸梓 与朋友共之 回遠詩壇 幸垂 藻鑑 謹咨

11 幻謂 彼邦所罕見 宜哉 吾邦往々不見焉
12 養近得中興間氣集 小隱畫堂 復溫柔篤厚之体 中興間氣集 還貞網開元之風

- 唐中興間氣集目錄 渤海 高仲武集 切見詩之流傳于世多矣 若唐 之中興間氣河嶽英靈集 則世所罕見焉 本堂今得此本 編次既富 挑摘又精真 詩中無價玉也 敬錄諸梓 与朋友共之 回遠詩壇 幸垂 藻鑑 謹咨
- 五三
- 1 李希仲詩二首 李嘉祐詩八首 章八元詩一首 戴叔倫詩二首 皇甫冉詩十二首 杜諲
 - 2 詩二首 朱灣詩八首 韓翃祐詩七首 蘇渙詩二首 卷下 郎士元詩十二首 崔洞九
 - 3 首 張繼送判官 往陳留 感懷 夜泊松江 刘長卿詩九首 李季蘭士有百行女唯四
 - 4 德云々 詩六首 寶參詩二首 道人灵一詩四首 姚倫詩二首 戴叔倫詩二首 皇甫曾詩五首 子雲葉卿

- 5 詩四首 西蜀劉鴻詩四首 張南史詩三首 已上作者二十五人
養考之
- 6 間氣 旧抄 間氣集 卷 高適所集也 幻按 才子傳 高適
所選至德迄大曆作者二十六
- 7 人詩 為中興間氣集 卷 自四体至間氣等集撰者之名 村
庵義同旧抄「名」見せ消
- 8 幻又按 鄭公集 卷下 讀前集 首 其前篇云 殷璠纂
英灵集 頗覺同才得
- 9 旨深 何事後來高仲武 只題間氣末公心 其後篇云 風騷如練
不勝悲 國步多難即此時 愛日滿階看
- 10 古集 祇應陶集是吾師 才子傳 高適字達夫 一字仲武
11 幻按 唐丹陽進殷璠製河岳英灵集序云 夫文有神來 氣來
情來 有雅體 野體 鄙體 俗體 云々
- 12 自蕭氏以还 尤增矯飾 武德初 微波尚在 貞觀末 標格漸
高 景雲中 頗通遠調 開元十五年後 声
- 13 律風骨始備矣 由主于華華好朴 去偽從真 使海内詞場 翕然
然尊古 南風周雅 称闡今日「翕然」は「翕然」にすべき
- 14 璠不揆 竊賞好事 願刪畧辭才 贊聖朝之美 爰曰遺跡 得遂
宿心 粵若王維 昌齡 儲光義
- 15 等二十四人 皆河岳英灵也 此集便以河岳英灵為號 詩二百三
十四首 分為上下卷 起甲寅 終
- 16 癸巳 倫次于叙 品藻各冠篇額 如名不副其實 才不負道
縱權壓梁竇 終無所取焉「冠」某字墨汚れ 左傍にヒ。取る
べき」
- 17 襄城楊士弘 唐書序云 云々
- 18 幻謂 三昧 近代周弼所編也 然則雖在姚合韋莊所集之後
此序以三昧為主 故舉之居第一也
- 19 村庵 所講亦如此也 又論編者年代 則高適出於姚合韋莊之前
然以四體為前 以間氣為
- 20 後 不必分第次乎 又隨語之便也「分第次」、「分」第一間に
插入符あり、「次」右傍に転倒符ある。「分次第」にすべき」
- 21 中興間氣集 或本曰 陸放翁渭南集 二十七 跋中興間氣集 高
適字仲武 此集所謂高仲武
- 22 乃別一人名 仲武非適也 或曰 日本履歷引殷璠河岳英灵集載
此事 中興間氣集係高仲武者
- 23 恐非歟 集中所序 作者廿六人 起至德初 止大曆末 又云
唐興百七十載 當是貞元之初 而適死
- 五四
- 1 於永泰 却在大曆貞元之前 彼別一人歟 養私引之
- 2 老子經云 玄之又玄 衆妙之門 云々 玄衆妙字 本於老子也
- 3 掛韻 衛瓘字伯玉 晋咸寧初 加侍中 時索靖為尚書郎 俱善
草書 号一臺一妙 子恒工草 顯 為
- 4 四体書勢 云々 四然一妙字本於茲乎 晋書 恒字巨山
云々
- 5 事文類聚別集 十三 書法部 晋衛恒四體書勢 成 點 點
狀似連珠 絕而不離「黑*知」。以下同。「黑*南」。
以下同。」
- 6 五音類聚十三黑部 一 涉移切 一 草書勢 崔子玉記 一 乃括切 點
草書勢 衛恒所造 一 點 一 五音類無三字 注作 一 黑*

圭。以下同。【五音類無】、「類」無間に挿入符あり、右傍に「聚」。「五音類聚」にすべき。】

7 字耳 三字 从圭 恐属佳等韻平 又黑部 出四字 四音 知柱切 點四 也 云々 恐此字平 然則 一字 注 四 黑字 主

8 誤增 畫作 三平 事文類聚作點 々 三 相似 未知孰正 玉 篇 點八切 又 玉篇 有 五 字 鳥圭切 增 見 消 五 黑 奎 一

9 等字 養講 向內 向外等謂也 四體 衆妙 二妙 三 集 未知誰其所編也 異說雖多 未見本拠

10 然其 一 幻謂 季昌不唯註 三 疑 又似注 四 疑 極玄 又玄 衆妙 二 妙 英靈 間氣等集 不知如何 雖然實

11 三 疑 一 集之註 而其餘類例等之乎 又玄集序曰 謝玄暉文集盈編 止誦澄江之句 曹子建詩名冠古

12 唯吟清夜之篇 云々 姚合所撰極玄集一卷 傳於當代 已尽精微 今更探其玄者勒成又玄集二卷

13 云々 光化三年七月二日 前右補闕章 莊述 養按 此序見于文章類選卷五

14 然其用事 用故事之始末也 直用四書六經者 源也 用四書六經之末書者 委也 見聞者 自所

15 見者為見 隨人所聞者為聞也 唐人詩所用故事 不易識焉 博考書冊以正之 又以所聞者 參

16 之為注解也 源委 札記 學記云 或源也 或委也 註泉本也 委末也

17 又注云 泉所出 委 泉所聚也 注 云 泉、三 云「泉」間に挿入符あり、右傍に「源」。注 云 源 泉所出」にすべき。【「泉

所聚、「泉」右傍に「流」。「流所聚」にすべき。】

19 簡冊云々 簡牒也 古者無紙 有事書之於簡 又手版 古制長二尺四寸 短者半之 漢制長一尺 短者半

20 善單執一札 謂之簡冊 符命也 諸侯進受於王者也 長一尺 短者半之 連編諸簡為策 杜預曰 大事書

21 之於策 小事簡牘而已 平昔ハ 言ハ 平生ト云心ソ 養講 如此 見聞ハ 約自他ソ

22 昔 字左傍に「シヤク」

五五 1 訓釋 說文 曰 訓 說教也 徐曰 訓者順 二 其意 二 以訓 レ 之也 論語 序 孔安國為 二 之訓說 二 疏云 訓亦注也

2 又云 訓說者 文字解之耳 旧抄 云 訓釈遭師釈也 3 論語 旧抄 諗 告也 謀也 諸 助之辞也 或云 諸字

4 諸友義歟 入梓 梓ハ 板ニヨイ木也 蘭 云 梓ハ 堅木也 マユ ミノ木也

5 幻謂 咸字 束簡冊所載 平昔見聞云咸也 或謂 三 體 四 體 英 氣 間 氣等注平

6 啓蒙 旧註 淮南王傳 如 二 啓發蒙 レ 覆之易 二 史記淮 南王安傳 發蒙云々 註 如淳曰 以物覆其

7 頭 而為發去其人欲 レ 之耳 韋昭曰如蒙巾發之其易 發蒙ハ 二義也 頭也 面ニ物ノカハツタハ

8 トリノケタイラ サツト ノケタレハ ハレハレトシテ ヨイ ト云心也 又頭上巾ナントラ チャツト トツテヲクハ ヤスイ

心也

9 ソコノ物ヲ トツテ ソハニ ヲクホトノ 事ソ 啓蒙 發蒙
ハ 同意也 此ノ序ノ心ハ 第一解ノ 氣ノ ハレハレハレトナ
ルニ

10 トル也 養按 發蒙字 汲黯傳亦有之 無注

11 余尚懼 旧抄云 重説謙之語也 季昌毛 随分辛勞シテ 念比

12 ニ シタト思ヘトモ 疎草ニ 愚昧ニシテ シヲトシカ
多ランソ

13 晋朱文公——朱熹 字元晦 学於屏山籍溪 以一心翫造化之原
尽性情之妙 達賢聖之蘊 以一身「達賢聖之蘊」、「達」賢

間に挿入符あり、「聖」右傍に転倒符ある。「達賢聖之蘊」にすべ
き。】

14 体天地之運 備事物之理 任綱常之貴 云々【「貴」は「責」
の誤植か】

15 名臣象外集 十二 朱熹 字元晦 間自称曰仲晦 父章裔没
託孤於少傳刘子羽 居崇安縣屏

16 山下 從游刘子聲 五歲入小学 始誦孝經 即了其大義 書八
字於其上曰 若不如是 便不成

17 人間從群兒嬉遊 独以沙 列八卦象 詳觀側玩 云々 又云
ム小口未有知 亦嘗字禅 只李先【ム(朱)】【〇(山)】(時)】

18 生極其不是 后来考竟 却是言邊味長 才這辺長得一寸 那辺
縮了一寸 到今銷鑠無余【「言邊」は「這邊」か】【「余」後に挿
入符あり、左傍に「矣」。「無余矣」にすべき。】

五六

1 朱子語録 楚詞注云 下事 皆無這事 是他曉不得 却就那語
意 撰一事為證 却都失了也

2 那正意 如淮南子山海 皆是如此

3 朱文公 掛韻 朱熹字元晦 居崇陽山下 從字於屏山籍溪 以
一心翫造化之原——常之貴 初【「貴」右傍に「貴歟」】

4 居崇安 扁讀書堂曰崇陽書堂 後築室建陽 號雲谷老人 其草
堂曰晦菴 自號晦翁【扁(遍)】

5 晚居考亭精舍 號蒼洲病叟 最號愚翁 宋紹熙中 除煥章待制
理宗朝贈太師封微國

6 公 言行録外十二 朱熹傳 嘉定元年 諡曰文

7 註 韻會 方言 南楚謂之支註 一曰解也 識也 廣雅 疏也
通俗文記物曰 註通作注

8 又 論語序 考之者古以為之注 疏曰 注者 自前漢以前 解
書皆言傳 去聖師猶近傳先師之

9 義也 後漢以还解書皆言注 々己之意於經文之下 謙不必是之
辞也

10 補云 晦菴楚詞注与文選注ハ 何処カ ワルイ 不足ナト 云
事ハ ミエヌソ 村亦云ソ

11 村云 李善祖述之謬 必可在文選之中 未詳
闕疑 論語為政篇 子張字「レ」子 〔「レ」禄 日子 多ク
テ〕 闕「レ」疑 慎言「二其餘「二」 則寡「レ」尤「二」曰
子、「子」右傍に転倒符あり、「子曰」にすべき。】

13 朱文公詞楚辞——闕疑 祖述謬者 先輩往々穿鑿 不足為拠
幻按 朱子集註楚辞闕疑

- 14 之證 甚多矣 河伯章末 右河伯^ハ 注云 旧説以為馮夷 其言荒誕 不可稽考 今闕之 大率謂黃
- 15 河之神耳 又天問章云 中央共^ニ牧后何怒^ル 蠶蛾^ハ微人命力何固 註云此章末「レ」詳 亦當闕 又其「行頭に「蠶蜂 同「蠶蛾」^ハ「蠶」 右傍に「ヒ」か」
- 16 章云 薄暮鼯 飯何憂 厥嚴不奉 帝何求 註此註下皆不可曉 今闕其意 又抽思章「註下」「註」右傍に「ヒ」。「註此下皆不可曉」にすべき。
- 17 悲秋風之動容兮 何回極之浮々 注云 大氏此下諸篇用字立語多不可解 甚著 今皆闕之
- 18 不敢強為之說也 又其章云 軫石歲鬼 蹇吾願兮 超回志度 行隱進兮 注云 軫石未詳 超「歲鬼」は「威鬼」の誤植か
- 19 回隱進 亦不可曉 今并闕之
- 五七
- 1 漁隱叢話前集第一 蔡寬夫詩話云 五言起於蘇武李陵 自唐以來有此說 雖韓退之
- 2 亦云 然蘇李詩世不復見 惟文選中七篇耳 世以蘇武詩云 寒冬十二月 晨起 踐^ニ凝霜^一 俯觀
- 3 江漢流 仰視浮雲翔 以為不當在江漢之言 或疑其偽 予嘗考之 此詩若李陵 則稱
- 4 江漢 決非是 然題本不云李陵 而詩中且言相髮為「レ」夫婦之類 自非在虜中所作 則安知
- 5 武末豈至江漢邪 但注者淺陋 直指為使匈奴時 故人多惑之 其實無拋也 古詩十九首 或
- 6 云 枚乘作 而昭明不言 李善復以其有駢^{カリテ}「レ」車上^ニ東門^一「二」与游戲宛与洛之句 為「二」辭兼「二」東都「二」
- 7 然徐陵玉臺分西北有浮雲以下九篇為乘作 而語皆不在其中 而凜々歲暮 丹々孤
- 8 生竹等別列為古詩 則此十九首 盖非一人之辭 陵或得其寶耳 乘死在蘇李先 若尔則五
- 9 言未必始二人也 幻謂 蔡寬夫詩話所謂註者 淺陋指向 註非善注 見文選注
- 10 又文選古詩十九首注 善曰 並云古詩 盖不知作者 或云枚乘 疑不能明也 詩云 驅馬上東門 又云 遊戲宛与
- 11 洛 此則辭兼「二」東都「二」 非尽是乘明矣 昭明以失其姓氏 故編在李陵之上 幻謂 文選廿九卷 古詩十九
- 12 首之次 載李少卿 蘇子卿詩 又云 西北有浮雲 文選作西北有高楼 上与浮雲齊 西北有高楼者
- 13 十九首中第五首也 丹々孤生竹 結^{ヘリ}「二」根泰山阿^一「二」者第八首也 凜々 歲暮 蟪蛄夕鳴悲者 第十六章也 李
- 14 善為十九首 尽非枚乘作 徐陵為十九首中九篇是枚乘作 寬夫意謂徐陵為「レ」可 李善為不
- 15 可也 此序所謂祖述之謬 或謂此等乎 漁隱叢話前集第一
- 16 東坡云 余讀文選 恨其編次無法 去取失當 齊梁文章衰陋 而蕭統尤為卑弱 文選可斯可見矣 云々 李善注文選 本末詳備 極可
- 17 喜 所謂五臣者 真俚儒之荒陋者也 而以為勝善 亦謬矣 幻謂 東坡所謂謬者 非善而指
- 18 世俗 不可為此注之證矣

- 19 祖述 中庸 仲尼祖述堯舜 憲章文武 新註 祖述者 遠宗其道 憲章者 近守其法
- 20 詩法源流云 詩亡而離騷作 亦國風之變也 朱子集注以屈原所作爲首 而附字騷者 於
- 21 後 是亦夫子刪詩 而附諸國風於 兩之意
- 22 朱文公——裴庾求名公校正容目云 臺卿七篇之解甚明 尚慮這闕以需改正附翁四「裴庾求名公校正容目」は一〇頁にある
- 五八
- 1 書之註已備 猶設或問以辨疑訛 云々
- 2 況其——幻謂況其餘者乎 五字 或者辞乎 又至「祖述之謬」一 或者辞也 況其以
- 3 下五字 季昌辞也 然則況其小段乎
- 4 博洽 古抄 求潤色於後字之辞也 旧註 刘向傳 博物洽聞 云々 後漢書班傳末論
- 5 曰 迂博物洽聞
- 6 庶幾 幻謂 博學君子 補「正」「余」「疎」「昧」「」 則為「レ」幸也 蓋源季末「レ」達 故多「二疎昧」「」也
- 7 補而正之 幻謂 闕疑者補之 或謬者正之 字勢与文公侍讀所注相應也 幻又謂 論
- 8 文公 則云闕疑 論侍讀 則云或謬 語有輕重也
- 9 時至大二年 蘭譜云 自元至大二年 至日本文明九年歲次丁酉 百一十七年也 至明應
- 10 九年歲次庚申 得百五十年也 至享祿五年歲次壬辰 得八十年

- 也 養考之
- 11 季昌書 古抄云 季昌自作序 故不言序 而只言書也 或曰如古抄所叙 有例乎 幻謂 増
- 12 注 山谷集載淵自序云 政和辛卯重陽日書 蓋注其書者 自作序 則書之證也 雖
- 13 然未必定
- 14 村云 季昌姓名 除三昧注之外 未曾聞之
- 15 養按 困学紀聞卷之十七曰 李善注文選 詳且博矣 然猶有遺缺 嘗觀荊州楊誅「楊」右傍に転倒符あり、「楊荊州誅」にすべき
- 16 謂督「二勲勞」一 不引左氏 謂督不忘 執友之心 引曲礼 執友 称「二其仁」「」注 謂督不忘 即微子之「執」左傍にシユウ
- 17 命曰 篤 不「レ」忘也 古字 督与篤通用 以督爲察 非也 養按 文選五十六 潘安仁所製 楊荊州誅曰 謂督「二勲勞」「」班命弥「崇」善曰 以清高勲勞
- 五九
- 1 進封東武伯 說文曰 督察也
- 2 傳公十二年 左傳 齊侯使管夷吾平「二戎于王」「」王曰 舅氏 余嘉「二乃勲」「」應「二乃懿德」「」謂「二督」「督」右傍に「厚」。「督厚」にすべき
- 3 不「レ」「二忘」林解曰 謂汝功德 督厚 不可强忘
- 4 曲礼曰 執一友 称「二其仁」「」
- 5 尚書 第七 衛 衛子之命曰 予嘉「二乃德」「」曰

6 篤^{クシテ}「不忘^{ニ忘レ}孔傳^ハ言^ハ微子敬慎^{ミテ}能^ハ孝^{アリ}」^微「三恭^ス神人^ヲ」^二故我善^ニ「汝德^ニ」^二謂^ニ「三厚^ト不^レ「二可^レ」忘^ニ」^謂左傍に「へり」

六〇

1 已下至思無邪 論語為政之詞 言為政之道 唯思無邪 ヲ々則
飯於正也 乃詩□均以為詩 舉之也

2 村云 方回序 全篇五段也 子曰以下一段 近世以下一段 又

有^二以下一段 唐詩以下一段 近高以下一段^一【こより原典にある方回序「子曰」から「葉正則」が写されている】

3 幻雲本段 子曰 又曰小子 聖人之論 近世永嘉 而漢魏晉又有所謂 而古之

4 唐詩前以 宋詩則歐 渡江以來 雖然以吾 近高安 又從而註 一山魁

六一

1 論語為政篇 子曰詩三百 疏云 此章拳詩 證^二「為^レ政以^レ」^レ德之事^二」也 詩即今之毛詩也 三百^一【為^レ左傍に「スルニ」

2 者 詩篇大教也 詩有三百五篇 此舉其全數也

3 一言以蔽之 疏云 一言 謂思無邪也 弊 當也 詩雖三百篇之多 六義之廣 而唯用思無邪 之

4 一言 以當三百篇之理 猶如為政 其事乃多 而終歸於以德不動也

5 六義者 □菴云 此一條本出於周礼 師之旨 蓋三百篇之綱領

管輅也 風雅頌者 声乐部分【「礼」師 間に挿入符あり、右傍に「大」。「大師」にすべき。】

6 之名也 風則十五國風 雅則大小雅 頌則三頌也 賦比興則所以製作風雅頌之体也 賦者

7 直陳其事 如葛覃卷耳之類 是也 比者以彼狀此 如螽斯綠衣之類 是也 興者託物興

8 詞 如關雎兔置之類 是也 蓋衆作呈多 而其聲音之節 製作之体 不外乎此 故大師之教

9 國子 必使之以是六者 三經而緯之則 凡詩之節奏指歸 皆得不待講說 而直可吟

10 詠以得之矣 六者之序 以其篇次 風固為先 而風則有賦比興矣 故三者次之 而雅頌又次之 蓋

11 亦以是三者為之也 然比興之中 螽斯專於比 而綠衣兼於興 兔置專於興 而關雎兼於比

12 此其例中 又自有不同者 學者亦不可以不知也 又三經 謂風雅頌 蓋其体之一定也 三緯 謂賦比興

13 蓋其用之不一也 蔡寬夫詩話云 秦漢以前——魯也所謂 此三經緯見于前

14 曰思無邪 疏云 此即詩中之一言也 言為政之道 唯思^レ於^レ無^レ邪 無邪則飯於正也 衛瓘^ニ疏云^一、疏^二の字

右半分のみ書かれてい^レる^一 15 曰 不^レ思^レ思^レ思^レ正^レ 而曰思無邪 明^二正無^レ思^レ所^レ思^レ邪^一 々去^ニ則合^ニ「二於正^二也^一」^二々去^ニ見せ消^ニ

- 16 毛詩^{モウシ}二十^ニ頌^{ソウ} 頌^{ソウ}レ^ニ傳公也^{ヘンコウ} 云々^{云々} 思^{コト} 無^ムレ^ニ 邪^{ヨコナ} 思^思
 「二」馬^マ 斯^ス 徂^レ 思^思 云^云 思^思「下」^下 適^適「二」伯禽之法^{ハクインノホウ}「二」
 專^{セン}上^上「レ」心^{シン} 無^ム「二」復邪意^{フセイイ}「二」伯禽^{ハクイン} 右傍に「周公之
 子」とある^{子トある}
 17 也 徂^レ 牧^レ馬^マ 使^シ「レ」可^レ「二」行^二「走也」^{走也}「可^レ」行^行 間
 に挿入符あり、「走」右傍に転倒符ある。「可^レ走^レ行^レ也」にすべき。
 18 思無邪 魯頌 駟^シ篇之詞 夫子讀詩至此而有合於其心焉 是以
 称之 蓋言善者 可以感
 19 論語發人之善 惡者 可以懲^レ人之逸志也 此詩本美魯僖公牧
 馬之盛 由其心思之「善」惡^レ 間に挿入符 一個あり、右傍に「心
 言。」「發人之善心 言惡者」にすべき。
 20 正如美衛文公秉心塞^レ困 而駟^レ牝^レ三千之意也
 21 詩傳序云 或有問於余曰 詩何為而作也 今應之曰 人生而靜
 天之性也 感於物而動 性
 六二
 1 之欲也 夫既有欲矣 則不能無思 既有思矣 則不能無言 既
 有言矣 則言之所不能
 2 尽 而發於咨嗟歌歎之餘者 必有自然之音響節奏 而不能言焉
 此詩之所以作也
 3 曰然則其所以教者何也 曰詩者人心之感物 而形於言之餘也心
 之所感有邪正 故言
 4 之所形有是非 唯聖人在上 則其所感者無不正 而其言皆足以
 為教 云々 昔周盛時

- 5 上至郊唐朝廷 而下達於鄉黨閭巷 其言粹然 無不出於正者
 聖人固曰協之聲律
 6 而用之鄉人 用之邦国 以化天下 至於列国之詩 則天子巡守
 亦必陳而觀之 以行黜陟之典 降
 7 自昭穆 而後寢以陵夷 至于東遷 而遂廢 不講矣 孔子生於
 其時 既不得位 無以行帝
 8 王勸懲黜陟之政 於是特筆其籍 而討論之 去其重複 正其紛
 乱 云々
 9 義案 為政篇 詩三百 一言以蔽之 曰思无邪曰取於正 正
 義曰 此章 言為政之道 在於去邪
 10 取正 故舉詩要當一句以言之 詩三百者 言詩篇之大數也 一
 言蔽之者 蔽 猶當也 古
 11 者謂一句為一言 詩雖有三百篇之多 可舉一句當其理也 曰
 思無邪者 此詩之一
 12 言 魯頌駟篇文也 詩之為體 論功頌德 止僻防邪 大抵皆取
 於正 故此一句 可以當之也 註
 13 孔曰 篇之大數 正義曰 案今毛詩序 凡三百一十一篇 內
 六篇亡 今其存者 有三百五篇【「今」を書きかけ、見せ消】
 14 今但言三百篇 故曰篇之大數 興引聲連類 聲喻 学
 詩則長於聲喻【「興」、「聲喻」は六二16に見える】
 15 論語陽貨篇 子曰 小子疏云 呼「二」諸弟子「二」 欲「レ」語
 「レ」之也 何莫^レ学 疏云 門弟子汝等 何無「二」学夫詩者耶
 【「諸」右傍に書入れ指示あり、「門人」とある。「諸門弟子」に
 すべき。】【「者」後に挿入符あり、右傍に「耶」。「詩者耶」にす
 べき。】

- 16 詩可以興 ^{ケル} 疏云 又為說「下」所以「レ」宜「レ」学之由「上」也 興 謂「二」譬喻「一」也 言若能学「レ」詩 々可「レ」令「レ」
 「二」人能為「二」譬喻「一」也
 17 可「二」以觀「一」 疏云 詩有「二」諸国之風「一」 々俗盛衰 可以觀賢以知之也 可以群 疏云 詩有如圖切如磋 如琢如「琢」 見世消
 18 磨 是朋友之道 可以群居也 可以怨 疏云 詩可「二」以怨刺 諷諫之法 言「之」者無罪 聞「之」者足以戒 故可以怨也 迹 之事父 疏云 詩有「二」凱風 白華「一」 相戒「二」以養「一」 是近有事父之道也 又雅頌君臣之法 是有遠事君之道也 灝云 言事父与事君 以有「レ」其道 多識於鳥獸—— 疏云 関雉鵲巢 是有「二」灝 右傍に「江」。「江」灝にすべき。
 六三
 1 鳥也 駟虞狼跋是有獸也 采繁葛覃是有草也 甘棠棣實是有木也 詩載其名 学「二」采繁 左傍に「セイハン」、「葛覃」 左傍に「カツタン」、「棣實」 左傍に「イキボク」とある
 2 詩者則多識之也
 3 蘭云 四書五經 新註ノ点 本注ト カワル也 此序ハ 新注以後也 可用新注ノ点也
 4 蔽「レ」之 多 識「二」於「レ」是 古注ノ点也
 5 蔽「レ」之 多 識 於「レ」是 新注ノ点也 幻
 謂 此詩之脉也 此詩之用也 虚雙関鍵
 6 毛詩之語也 举「二」脉用「一」 則四始六義在「二」其中「一」也

- 發語用「二」子曰字「一」者 示不容易也
 7 蔽之 朱意云 蔽 猶蓋也 輯釈 語錄 盖如以一物盖尽衆物 又輯釈 詩云 駟々 牡馬 在「二」垌之
 8 野「一」 云々 思無邪 思馬斯徂 此詩本美齊僖公馬 之盛由其心思之正 如美衛文公秉心塞淵
 9 而騷牝三子之意也 作詩者 未嘗以此論詩之旨 夫子詩至此而 有合於心焉 是以取之 盖「二」子「一」詩 間に挿入符あり、右傍に「讀」。「夫子讀詩」にすべき。「一」此 見世消
 10 斷章摘句云耳 又語錄 詩三百篇 皆要人無邪思 然但逐事無邪 惟此一言舉全体言之 刈金
 11 思在言与行之先 思無邪 則所行皆無邪矣 問聖人六經皆可為戒 何独詩也 曰固是如此 然
 12 詩 因情而起 則有思 欲其思出於正 故独指思無邪 以示教焉 又朱子曰 行無邪 未是
 13 誠 思無邪 乃可為誠 是表裏皆無邪 徹底毫髮之不正 云々 輯釈 盖謂所思自然無邪 誠
 14 也 聖人事也
 15 詩可以興 朱集注 感發志意 大合朱子曰 讀詩見不美者 令人羞惡 見其美者 令人興起 須
 16 是反覆讀 与心相乳入 自然有感發处 可以觀 集注 考見得失 大合新安陳氏曰 觀詩「讀」与「問」間に挿入符あり、左傍に「使」。「使与心」にすべき。
 17 所美所刺者之得失 亦因可以考見我之得失 兼此己意方為尽可以群 集注 而不流 可以「称」 見世消 右傍に「和」。「和而不流」にすべき。

18 怨集注 怨而不怒 迹之事父——集注 人倫之道 詩無不

備一者筆重而言 大全 新安陳氏曰

19 如閨離言夫婦 棠棣言「二兄弟」「二朋友」「二之類

又云 父子君臣 人倫之大者 多識於——「代」見世消、右傍に「伐」。「伐木」にすべき。」

20 幻謂 方回居紫陽 慕朱紫陽 故此序所引用論語之文 用朱子注講之可也

六四

1 聖人——古抄云 聖人指孔子也 此一句結上面綱條也

2 後世——古抄云 後世指元朝也 幻謂 此一句 結前生後也

後世不必指元朝 謂聖人以來也

3 村云 後世ノ詩ヲ学ハント 思者ハ 此聖人ノ 所論ノ 為政陽貨篇ノ 詩評ヲ 捨テ 他人論スル処ヲ 求メ

4 ハ 不可也

5 幻又謂 此字或指毛詩 蓋捨毛詩為晚唐之說 豈可豈 此義無用乎 村義可乎 捨此之此字「可豈」「豈」右傍に「哉」「豈可哉」にすべき。」

6 此詩之体 此詩之用之此字乎 幻謂 後世論詩結聖人論詩後世學詩起近世 字也

7 興 謂譬喻也 言若能字詩 可令人為譬喻也 觀々風俗盛衰也 群々居 相切磋也 怨々刺諷諫「行頭右傍に書入れ「以下雪本」

8 也 言之無罪 聞之以足戒 故可以怨也 新云 感發志意 考見得失 和而不流 怨而不怒「聞之以足戒」「之」「以」間に

挿入符あり、「足」右傍に転倒符ある。「聞之以足戒」にすべき。」

9 迹近也 詩有凱風白花相戒以養 是事父之道也 雅頌君臣之法是事之道也 閨離鵲巢是有

10 鳥也 騶虞狼〇是有獸也 「〇」イモ昆。「跋」の誤植か」

11 蘋蘩葛藟 是有草也 甘棠棣樸是有木也 迹之 云々 人倫之道 詩無不備 二者筆重而言 如閨

12 離言夫婦 常棣言兄弟 伐木言朋友 然父子君臣 於人倫之中最重者 其緒餘鳥獸草木 又足「常棣」、六三「棠棣」とある」

13 以資多識也

14 摛藻跋淮海塔畫軸後云 淮海少年時 嘗贊 詩謁水心先生 々々和其詩 由是叢林雖不識「贊」右傍書入れ、「脂利切」とある」

15 者 亦稱肇淮海 每得句 必對余朗誦 以首觸予懷 涎沫噴予面不瀆也 然其中恢疎无

16 他賜 水心文章鉅公 禪非其所學 或謂見水心有所得 此語得之鳥有先生耶 抑亡是公也

17 聖人云々 蓋詩者 一南二十五篇為王風 邶至豳一百三十五篇為變風 鹿鳴至蕤 二十五篇為

18 正小雅 六月至何草木不黃五十八篇 為變小雅 文王至卷阿十八篇為大雅 民勞至召旻十三

19 篇為變大雅 朱子曰 一南用之闡明鄉黨邦國而化天下 自邶以下十三國 亦領在樂官 垂鑑

20 戒耳 正小雅 燕饗之樂 正大雅 〇朝之樂 周公制作時所定也 及其變也 則事未必同而各以「〇」「山」「乃」「會」

21 其声附之耳 愚案 漢魏以來 詩道浸微 哇淫甚矣 曹刘及謝

詩 如刻繪染綬 可施之貴介公

22 子 独陶詩如蕤蘭幽桂 宜於山林 皆六百篇之餘風 故云

俱廢矣 雖然東坡論陶詩云 質而實

六五

1 綺 塵而實 朕自曹刘 鮑謝李杜諸人皆莫及也 刘后村亦云

陶公如天地間之有醴泉慶

2 雲 是惟無出 々則為祥瑞且饒 由是言之 陶詩可貴乎

3 葉正則 葉姓名適 字正則 号水心先生 適送聲書記詩云海

潤淮深万里通 吟情浩蕩

4 逐春風 却尋斗絕蕤淑底 截取雲烟字々工

5 養按 本曰 至天隱註 周伯〇三体詩序如「レ」此序 前二題

也 古本亦此方回序在後「養按 本曰」「按」本「間」挿入

符あり、「古」右傍に転倒符ある。「養按 古本曰」にすべき。【〇

「明文」【〇】より原典にある方回序「水心 倡為晚唐體之說」

から「有一詩之法」が写されている】

六六

1 幻又謂 聖人論詩 後世論詩 两个詩字 指毛詩也 後世學詩

之時 亦指毛詩乎 又謂 學作詩法乎

2 近世永嘉——排韻 葉適号水心先生 有文集行世

3 旧註云 葉適 字正則 号水心先生 葉適送聲書記詩 海瀾云

々 勝覽第九 永嘉郡人物部 葉適字正則 号「号」後に挿入

符あり、右傍に「水心」「号水心」にすべき。】

4 村云 倡トハ 取り持テ 晚唐様ノ 説ヲ ナシテ 四灵

ノ 詩ト 云ヲ 集メ 撰ス 其集ヲ 江湖カ本トシタソ

5 而モ 亦如晚唐躰 今ノ宋モ 晚ニ成テ 聖人所論ノ詩ハ 取

リアケテ 云イタス 事サエ ナキ也

6 或本云 温州志八云 宋葉文定公適居此 云々 又十四云 葉

適字正則一 徒永嘉 資慶茂異 風「徒 見せ消」

7 度澄肅 〇記誦如流 十歲能屬文 云々 卒歲七十四 諡文

定 云々 名重當世 四方學者 仰之如山斗【〇「解 右半分破

損カ」

8 咸称水心先生 云々

9 四灵詩 玉屑第一 近世趙紫芝 翁灵舒 独喜賣島姚官之

語 稍々 復就清苦之風 江湖「翁灵」「灵」右傍に「ヒ」。「翁

灵舒」にすべき。】

10 詩人多效其体 一時自謂之唐宗 不知止入声聞 辟支之果 豈

盛唐諸公大乘正法眼者乎 嗟乎「唐宗 右傍に書入れ指示あり、

「〇平」とある。】

11 正法眼之無傳久矣 幻謂 江湖宗之 玉屑所謂江湖謂之唐宗

江湖字映水心字「宗」「江」間に挿入符あり、右傍に「者乎」。「唐

宗者乎」にすべき。】

12 四灵——礼記礼運 麟鳳龜龍 謂之四灵 旧抄 或云 李

太白 杜子美 韓退之 歐陽永叔 謂之四

13 灵 今不用之 又云 永嘉徐照字灵暉 永嘉徐璣字灵淵 永嘉

翁卷字灵舒 清苑趙師

14 秀字灵芝 共為一集 号四灵詩 盖取礼記之義也

15 而宋亦晚矣 幻謂 亦字應于晚唐字也 言水心倡學晚唐 故江

湖知盛唐躰者鮮矣 水心之後 宋

- 16 亦晚矣 晚唐体無倡之者 況盛唐哉 於是周詩三百 束之高閣 蓋結拾此而他 求可乎之語也
- 17 而漢魏 玉屑十三 蘇子卿 李少卿之徒 工為五言 雖文律各異 雅鄭之音 亦雜 而詞意闊 〔蘇 右下に「武」とあり、〕
- 〔李 右下に「陵」とあり。〕〔蘇武、〕〔李陵〕の意
- 18 遠 指事言情 自非有為而為 則文不妄作 唐元稹撰子美墓誌
- 19 又云 秦少游云 蘇子之詩 長於高妙
- 20 雪本 晉宋齊梁 云々 晉有太康体 左思潘岳 陸之詩 太康西晉武帝年号也 宋有元嘉体 顏鮑
- 六七
- 1 詩 元嘉 南朝文帝年号也 齊梁有永明体 々通兩朝而言也 永明 齊氏武帝年号也
- 2 玉屑十三 建安詩 辨而不華 質而不〔レ〕^{イヤミ} 俚 風調高雅 格力遒壯 其言卓致而少對偶 指事情 〔建安詩 右傍に書入れ指示あり、〕〔曹刿〕とある。
- 3 而綺麗 得〔二〕風雅騷〔一〕人之氣骨〔二〕 最為〔二〕近〔レ〕古者〔二〕也 一變而為〔レ〕晉宋 再變而為〔レ〕齊梁 云々 詩眼
- 4 曹子建 玉屑十三 子建詩其源出〔二〕於國風〔一〕 骨氣高奇 辭采華茂 情兼雅怨 牀備文質 梁
- 5 然溢古 真尔不群 嗟乎 陳思王之於文章也 譬如人倫有周孔 鱗羽之有竜鳳 音樂之有琴 〔真尔〕は〔卓尔〕の誤植か
- 6 笙 女士之有麒麟 俾尔懷鉛吮墨之士 宜乎抱篇章而景慕 映餘輝以自燭 故孔氏之門如用 〔鉛 鉛〕
- 7 則詩 公幹昇堂 思王入室 景陽濯陸 自可坐於廊廡間矣
- 鐘嶸詩評 〔則詩、〕〔則 右上に挿入符あり、〕詩 右傍に転倒符ある。〔如用詩 則公幹昇堂 にすべき。〕
- 8 刘公幹 玉屑十三 公幹詩 其源出於古詩 伏氣愛奇 動多振絕 真凌霜 高風跨俗 但氣
- 9 過其文 然陳思已往 稍称独歩 詩話
- 10 四灵 云々 永嘉徐照 字灵暉 共為一集 号四灵詩 盖九華翻文伯所選也 〔四灵集 梅屋許崇作 前
- 11 序 曰 藍田種々玉 舊蜀片々香 然玉不擇 則不純 香不簡 則不妙 水心所以選四灵詩也 選非
- 12 不多 而文伯猶略 復有加焉 烏乎 斯五百篇 出自天成 煥神識 多而不濫 玉之純 香之妙者歟 〔烏乎 嗚呼〕
- 13 苦居不私宝 刊遺天下 後世學者 愛之重之 嘉澍己亥浴佛日 許裴敬書
- 14 幻講曰 四灵ノ詩ハ 水心先生力編ソ 又其二 翻文伯カアミソエタソ 灵暉灵淵灵舒灵乏之灵字ヲトツ
- 15 テ 四灵ト云タソ
- 16 陶淵明 玉屑十三 淵明意趣 真古清淡之宗 詩家祖淵明猶孔門視伯夷也 西澠詩話
- 17 三謝 玉屑十三 唐子西語錄云 三謝詩 灵運為勝 當就中寫出熟讀 自見其優劣也 又云
- 18 江左諸謝 詩文見文選者六人 希逸無詩 宣遠 叔源有詩不工 今取灵運 惠連 元暉詩 合六十四
- 19 篇為三謝詩 是二人者 語益工 然蕭散之自得之趣 亦復少減 漸有唐風矣 於此可觀世之愛也
- 20 而漢魏 幻謂 非唯不暇讀周詩 曹刘陶謝詩亦廢 盖所以宋之

晩也 漢字出河梁柏梁 魏字

21 出曹刘 晉字出陶謝也 詩至元確

22 漢柏梁詩 玉海廿九 古文苑 武帝作柏梁臺紀元鼎二年春賦詩乃元封三年也 臺建於元鼎二年 登臺訪群臣一「玉海」右傍書 入れ指示あり、「養按」とある。

六八

1 千石 能七言者 乃得上坐 帝曰 日月星辰和四時 自梁王以下作詩者二十五人 梁王曰 驂轔駟

2 馬從梁來 至東方朔而止 養按 見せ消

3 阿京紀 正觀五年 太宗破突厥 宴突利可汗於阿儀殿 賦七言詩柏梁體 御製 絕域降

4 附天下平 神通曰 八表無事悅聖情 無忌曰 雲披雲歛大地明 元齡曰 登封日觀禪雲亭

5 蕭瑀曰 太常具礼方告成 旧唐紀 儀鳳二年七月丁巳 宴近臣諸親於九成宮之咸亨殿

6 上謂霍王元軌等曰 甘雨頻降 夏麥豐孰 秋稼滋榮 思与叔等同為此歡 因賦七言【孰(熟)】

7 勅柏梁体曰 屏欲除奢政返淳 皇太子霍王相王侍臣並和 天寶十四載二月景寅 宴群

8 臣於勤政樓奏九部樂 上賦詩○柏梁体 群臣和 養按 儀鳳高宗年号【○(學)父(効)】

9 汝陽周伯○云々 幻按 此集題号之下 周弼自着声名义云 汝陽周弼伯明選 虛雙云 周伯○【○(弱)父(効)】以下16行目まで同。

10 不知孰是 按繪玉鑑云周弼字伯○ 楊仲弘詩法源流云周伯

弼 楊士弘唐音序

11 云周伯○ 續三體詩 饒仲恭序云 汝陽周伯弼 是以伯弼為字之證也 又按詩人高韻

12 序云 汝陽周○伯明序 中興江湖集云名弼字伯明 何仲德詩林萬選云周弼伯明 無

13 文郎云周伯明 次三體詩 李泰序云汝陽周伯明 同張顥序云汝陽周弼伯明 是以伯

14 弼為字之證也 此集漢著名 詩人高韻序皆周弼所自書也 足為信焉 疑是周弼

15 字伯明一字伯○乎 又云 伯明之義 乃分弼字 為兩字也 蓋百与伯通也 又弼字伯弼 猶

16 如杜牧字牧之 弼良反 韻會 弼古作○【集 見せ消、右傍に「渠」。「渠良反」にすべき。】

17 養按 繪玉鑑補遺云 周弼字伯明 汝陽詩人 善墨竹

18 養又按 中興江湖集申卷 東平周氏 文璞 字晋仙 自号野齋 子名弼 字伯明 弼良反【集 見せ消、右傍に「諱」。「諱文璞」にすべき。】

19 旧抄云 益付之——言古之詩 近朴而鄙野矣 抑古詩而揚唐体也 幻謂 不可也

六九

1 村云 曹刘陶謝俱廢スト 云ヘトモ 伯明力三體法ト云者アリ 聖人之所論詩ハ 真ニ 上古ノ 天地

2 モ 未分ニ 冥昧不明ナル時ノ事ヨト云テ ウチキリテ 取りモ アクスシテ 置ク也 是即廢スル也 此語ハ 前所

- 3 謂聖人之論詩 不暇講 ト云ヲ 結スル也 是ハ ハヤカウト也 サテ 三体ノ法ハ イカニト ナレハ 止於一詩
- 4 一句一字之法也 如此出三法 ヲケトモ 而今江湖ニハ 真ノ詩人ハ 断絶スル也 是亦益付「二古詩」
- 5 於鴻荒草昧之外「二」 詩追ノ廢スル故也
- 6 鴻荒 雪 楊子問遺篇云 鴻荒之世 聖人惡之 注 聖其与禽獸同也

- 7 草昧 周易屯卦 天ノ造草ノ味 宜「レ」建
「レ」侯 而不「レ」寧 注云 屯 体不「レ」寧 故利「レ」建
「レ」侯也 屯者 天地造始之時也
- 8 造物之始「二」 始於冥昧「二」 故曰草「レ」昧也 処「二」造始之時「二」 所「レ」宜之善 莫「レ」善「レ」建「レ」侯也
- 9 屯卦草昧 傳義此言時事 天造謂昧運也 草々乱無倫序 昧冥昧不 明 當此時運 所宜建立「昧明」 見せ消「冥」見せ消
- 10 輔助 則可濟屯 云々 正義曰 創昧謂冥昧 言天造万物於草創之始 如在冥昧之時也 于此草昧之時「二」 創 間に挿入符あり、右傍に「草」草創にすべき。
- 11 至王者宜法此屯卦 宜建立諸侯 以撫恤萬方之物 而不得安居無事也「冥」見せ消
- 12 一詩之法 村云 一詩之法ハ 詩一篇ノ中ニテ 何ノ法ニテ
- 13 コン アレ 一ノ詩法アルヘキ也 又一句之法ハ 何ノ法ニテ
- コン アランスレ 一ノ句法アルヘシ 又二字之法ハ 何ノ法ニテ コン アランスレ 一ノ法アルヘキ也 詩法 句法

- 字 多キ「字」「多」間に挿入符あり、右傍に「法」。「字法多キ」にすべき。
- 14 也 一二云イ 定メカタシ 或說ニ 定テ 云ソ 其法ニ 云 一詩之法ハ 賦比興也 一句之法ハ 起承轉合也 一字之法ハ 字眼也 幻謂 一詩之法 玉屑 第一出「二詩法」「二」云々 一句之法 第三出「二句法」「二」云々 一字之法 第六出

- 16 「レ」下「レ」字 云々 考之可推知焉
- 17 周伯弼 東平人 宋季南渡後詩人也 文陽詩人 善墨竹「二」弼父「二」
- 18 養按 文陽詩人 善墨竹「二」弼父「二」
- 19 無文郎 第十 南翁早受句法於深居馮君 來江湖 從北欄游 而又与吳菊潭周伯明杜北
- 20 山簞淮海輩友 故其学益老 深沈古淡 蘇州志三十七 顧逢
- 21 字君際 讀書筆進士不第
- 22 學詩於周弼 称为顧五言 自置其居 為五字田家 放情山水間 隱于臨安 別号梅山樵叟 有詩
- 十卷 傳日本僧

七〇

- 1 皇朝石公詩人膏馥 自一至十 詩之鉢衆矣 而絕句一鉢 小而難工 荊公三百首 議者指為本朝
- 2 作者之冠 徐師川独以為不及唐人 林和靖巾子微霜之句 切近於大曆 曾未有人稱誦 其好尚果
- 3 有不同邪 初菴華聚諸公所作 隨古鉢製 皆有所取 使讀

- 之有曾哲游曲阜之園而【抱】見せ消【有】見せ消】
4 遇鰲 屈到汜漢水之池而得菱 忻然各適其適 規摹宏濶 連編
巨帙 為世所喜 豈不偉哉 宝
5 祐甲寅冬 汶陽周弼伯明序
6 虛堂人靜不聞更 狹理殘書照夜灯 門外不知春雪霽 千峯殘月
一溪水 夜深 周汶陽鵠
7 玉樹分明照夕流 粉痕蠹為春宮留 三更枝上玲瓏雨 乱滴寒香
一夜愁 落梅
8 僧房欹枕幽閑甚 一任春風動袂衣 不料忽成惆悵事 片時飛尽
白薔薇 竹閣書生 以上音 詞人舊體第 藏之
9 周氏 名文璞 字晋仙 自号野齋 其子弼 字伯明 以上四首
中興江湖集載之
10 雲樹重々和淚吟 故宮遺廟有知音 秦吳万里路芳草 染到山花
恨最深 山中杜鵑花 文瑛
11 閉門不与俗人交 玄晏春秋日々抄 清曉偶然隨鶴去 野風吹折
白桜桃 晨起 又
12 梁家天子袍琵琶 泪洒華林御苑花 今日閑韶無所到 鴈烟蛩雨
属他家 金闕雜詠【抱】は【抱】の誤植か】
13 空山落日又逢僧 雨雜灰塵滿帽紋 但憶來時門不掩 麝香微臥
石床雲 送礼兄 伯明 已上幻本
14 雪本 刺坡云 讀魯直 如見舊仲連李太白 不敢復譚鄙事 雖
有不適用 然不為無補於世
15 後山詩宗承少陵鍵開闔 出入於少陵門庭 与黃豫章畧相似
豫章亦惟重 謂後山得
16 老相杜句 或者 若後山詩 非一過可了 近於枯淡 彼其用意
- 直追騷雅 不求合於世俗
17 一句云々 按阜春遊望詩云 偏驚物候新者 此句得下之一聯
雲霞出海曙 梅柳渡江春之意【晦 見せ消】
18 一字云々 經廢宝慶寺詩云 無僧寒殿開者 無之一字得下之一
聯 池晴龜出曝 松暝鶴飛回之意 已上
19 承上起下之詞
20 幻本 江湖無詩人——出于江湖宗之々字也 伯明撰二牀之時
江湖無能詩者也
21 唐詩前以 玉屑十四 太白放 人中鳳凰麟麒 譬如生
富貴人 雖醉着眼暗吟藝中 作無義語 終不作寒乞【亭 見せ
消、右傍に「豪」。「太白豪放」にすべき。】「鳳」麒 間に挿入
符あり、「麒」右傍に転倒符ある。「鳳凰麟麒」にすべき【「吟」
右傍に「唵」同敷 唵一感反 含也 玉篇 菴与倉同】とある【
22 者声 山谷【者】右傍にヒ。「寒乞声」にすべき。】
23 玉屑十四 六経之後 便有司馬迁 三百五篇之後 便有杜子美
六経不可学 亦不須字 故作文富字司馬迁 作
- 七
一
1 詩富字杜子美 二書亦須常讀 所謂一日不可無此君也 唐子西
語錄
2 玉屑十四 誠齋謂李神於詩 杜聖於詩
3 又同卷云 唐三百年言詩 則杜甫李白卓然以忻長為一世冠 文
藝傳序
4 雪本 〇溪詩話 東坡問老杜何如人 或言 似司馬迁 但能多
名其詩耳 吾謂老杜似孟子【〇 汎石】

- 5 朱文公云 作詩須先看李杜 如士人治本經 然本既立 方可及
蘇黃 東坡云 書之美者 莫如
- 6 顏魯公 然書法之壞 自魯公始 詩之美者 莫如韓退之 然詩
格之變 自退之始 劉后村云
- 7 子厚才高 他文惟韓可對壘 古律詩精妙 韓不及也
- 8 幻本 韓文公 玉屑十五 韓吏部 歌詩累百首 而驅駕氣勢
若掀雷抉電 撐決於天地之垠 奇筌題柳集後
- 9 又同卷云 書之
- 10 柳儀曹 玉屑十五 李杜之後 詩人繼出 雖有遠韻 而才不逮
意 独章應物 柳子厚 發纖機於簡古
- 11 寄至味於淡泊 非餘子所及也 云々 子厚詩在陶淵明下 韋蘇
之上 退之憂快奇險 則過之 温
- 12 麗靖深不及也 云々 東坡 嗜酒愛花 頽然自放 人
事生理 畧不介意 云々 〔嗜〕字前に×印あり、14行末尾「性」
字後に×印ある。「性嗜酒愛花」のように続くべき。】
- 13 〔姚合〕才子傳 姚合与賈島同時 號姚賈 自成一法 島難吟
有冽之風 合易作皆平澹之氣 興趣俱
- 14 到 格調少殊 所謂方拙之與 至巧存焉 差多歷下邑 官況蕭
條 山縣荒涼 風凋弊之間 尤上模寫也 性〔差〕右傍より「雪
本如此」とある。】
- 15 蘭云 慈氏講三昧詩時 不講姚合採松花詩 蓋本三昧詩不載採
松花詩也
- 16 欧梅 玉屑第一 歐陽公學韓退之古詩 梅聖俞學唐人平澹處
至東坡山谷 始自出己法以爲
- 17 詩 唐人之風變矣 山谷用尤深深刻 云々
- 18 黃 劉后村云 豫章曾粹百家句律之長 極歷代牀製之變 蒐獵
奇書 穿穴異聞 作為古律
- 19 自成一家 雖隻字片句不輕出 遂爲本朝詩家祖 在禪字中
比得達磨 真不易之論也 〔宋〕見せ消 右傍に「宗」。「宗祖」
にすべき。】
- 20 陳 後山集 門人魏衍撰陳先生集記云 先生陳諱師道 字履常
一字無己 云々 元城王雲題云 建中
- 21 靖國辛巳之冬 雲別涪翁於荊州 翁曰 陳無己天下士也 其作
詩深得老杜之句法 今之詩人不
- 22 能當也 子有意學問 不可不往掃斯人之門 雲再拜受教 云々
- 23 欧梅 蘭云 不論東坡何哉 欧其師 黃其門生也 含膏坡於其
中間耳 幻按 鶴玉露甲集第一 朱〔鶴〕玉之間に挿入符あり、
右傍に「林」。「鶴林玉露」にすべき。】
- 七二
- 1 文公云 一蘇以精深敏妙之文 煽傾危妄幻之習 又云 早拾蘇
張之緒餘 晚醉佛老之糟粕 余謂文公二〔煽傾〕右傍に「熾盛」
〔糟粕〕右傍に「羅大經景論」
- 2 十八字彈文也 自程蘇相攻 其徒各有其師 云々 文公每与其
徒言 蘇氏之學 壞人心術 學校尤宜禁
- 3 絕 編楚辭後語 坡公諸賦皆不取 唯收胡麻賦 以其文類橘頌
編名臣言行錄 於東坡公議論 〔編楚辭〕右傍に「朱子」
- 4 所取甚少 幻謂 方回承道於文公者也 故不取坡平
- 5 幻謂 前云唐詩無則字 後云宋詩有則字 文法可見
- 6 詩話云 歐陽詩如春服既成 春酒既醺 登山臨水 竟日忘飯

歐陽西湖詩云 綠芝紅蓮畫舸浮 使

7 郡那復憶揚州 都將二十四橋月 換得西湖十頃秋

8 劉后村云 梅聖俞本朝詩惟宛陵為開山祖師 宛陵出 而後葉漢之哇淫稍息 風雅氣脈復 其功不

9 在歐尹之下 又若溪云 聖俞詩工於平淡 自成一家 如東溪詩野鬼眠岸有閑意 老樹著花

10 無醜枝 山行詩 人家在何處 雲外一聲鐘 等句 須細味之

11 渡江 旧抄云 宋太宗皇帝都汴 欽宗北巡之後 高宗都杭 謂之南渡 宋太宗 宗 右傍に「祖」

12 放翁 柳韻 陸游字務觀 号放翁 詩本於曾茶山 々々出於韓子蒼 三家句律相似 而放翁加

13 豪 一夕夢一故相語曰 我為蓮花博士 鏡湖新置官也 我去矣 君能暫為之乎 月得酒十壺 亦不

14 惡也 遂以詞記之曰 白首鼎修汗簡書 每因口裏歎侏儒 不知月給千壺酒 得似蓮花博士無 口は一字分の空白 一字破損

15 初調官臨安 有詩云 小樓一夜听春雨 深巷明朝賣杏花 都人稱誦 傳入禁中 思陵稱賞 由是知名

16 玉林中興詩話云 陸放翁詩本於茶山 故趙仲白題曾文清詩集云 清於月出初三夜 淡似湯 行頭右傍に書入れ「雪本」

17 烹第一泉 咄々逼人門弟子 劍南已見一灯傳 劍南 謂放翁也 云々

18 楊誠齋嘗稱陸放翁之詩數腴 尤梁溪復稱其詩俊逸 玉屑云 余觀放翁之詞 尤其數

19 腴俊逸者也 雜之唐人花間集中 雖具眼 未知鳥之雌雄也

20 石湖 掛韻 範成大 字至能 号石湖居士 師江東陸辭 設宴

上命侍行 過西小軒再坐 二内侍捧繡素來 上

21 有石湖二字 御書尚溫 公拜謝奉觴上壽 乃選 石湖在平江盤

門西南十里 太湖之派 範蠡游湖 派 金苑 湖山絕勝 繪圖以傳

22 從入之處 公隨高下為亭觀植花竹蓮莖 湖山絕勝 繪圖以傳 公後見東宮曰 石湖已拜宸翰 有壽

23 棧堂願得玉書 太子書二大字賜之 乃即城居之南別宮一圃 題曰 範村 刻尚朝賜書於堂上 榜曰

七三 1 重奎 其北又蒼桃花塢 往來其間 嘗与客飲 有詞云 任炎天

2 饌 鵲絃鳳吹新番曲 人間何處似 樽前添銀燭 公文章瀛麗清 逸 自成一家 尤工詩 有

3 石湖集百三十六卷 吳門志五十卷 使北則有攬轡錄 過海則虞衡志 出蜀則有吳船錄 如三

4 高亭記 天下誦之 宋隆興中拜中書舍人 參加政事

5 渡江來 金人以徽宗欽宗 帝北狩奪宋江州郡一百廿二州 宋自太祖庚申定帝位汴 至欽宗靖康 廿三 三より原典にある方回序「有一詩之法」から「而文公詩未」が写されている

6 丙午 凡九帝 共享

7 一百六十八年 陷于

8 金 康王渡江都于

9 杭州 是為南渡

10 康王名構 徽宗第

- 11 九子 封康王載匹
- 12 馬南渡収復帝
- 13 **重奎業** 歳在丁
- 14 末 即位南京 是
- 15 為高宗
- 16 向上工夫 言行録【録】後に挿入符あり、右傍に「外集。」言行録外集にすべき。】
- 17 十二 朱熹傳 初見
- 18 □□ 說得無限道
- 19 理也 曾去學禪 李
- 20 先生云 公恁地懸空
- 21 理會得許多道理
- 22 而面前事 却理會
- 23 不下 道亦無他玄
- 24 妙 只在日用間 着
- 七四
- 1 實做工夫處 便自見得 其後來方曉得他說 故今日不至於無理會耳
- 2 向上工夫 幻案 大明正統五年 中吳沙門空谷景隆所述尚直編云 晦菴致書於開善謙律師
- 3 曰 薰向蒙大慧律師開示狗子仏性話頭 未有悟入 願授一言 警所不逮 謙答書曰 把這一念
- 4 ■提狗子話頭不要商量 勇猛直前 一刀兩 晦菴覽之有省 註出資鑑拱辰集 性理群書【「捨」見せ消】「提」【「狗」間に挿入符

- あり、「擲」右上に転倒符ある。「提擲狗子話」にすべき。】「両」
- 「晦」間に挿入符あり、右傍に「段。二刀兩段」にすべき。】
- 5 唐詩——村云 以下一段ハ 唐朝宋朝南度以後 詩人ヲ 枚拏シテ 其詩ノ体ノ變化 ハタラキヲ 一々体認シテ 辨シ識
- 6 則也ト 學者ニ教ユル意也 雖如此 以吾師文公詩 学 較
- 7 干唐宋詩 則文公高一著也 其詩ヲハ 誰モ 易スク
- 7 窺イ 測ランコトハ 大事ナルヘキ也 文公ハ サシテモ ナ
- キ詩人也 如此美之ハ 方回ハ 文公門人歟 文公ハ 欧梅黃陳
- 放翁
- 8 乃間ニハ ヒトカナイモ カナウマイ者ヲ 如此云ハ 真ノヒイキ也
- 9 体認變化 蘭云 諸賢各成一家多變化 後學子居翫味之
- 10 文公詩有向上工夫 故無彷彿其萬一者 所以冠南渡諸賢也
- 11 幻謂 方回居紫陽墓朱紫陽 又以朱詩 為向上 蓋有三百篇古風乎 宜乎晚唐風骨 不為尚矣
- 12 枯崖漫錄 劉翽齋云 文公朱夫子 初問進於延平 篋中所口 惟孟子一冊 大惠語錄一部耳 □□「推乃」携一
- 13 續宋通鑑云 因欽宗靖康之乱 高宗渡江 駐蹕江南 是為南朝
- 14 楊誠齋序【「右摘藥」云 余嘗論近世之■人詩 若龜石湖之清新尤梁溪之平淡 陸放翁之敷（二論 見せ消）】詩 右上に転倒符あり、「詩人」にすべき。】
- 15 腴 蕭千岩之工緻 皆余之所畏也 徽馳 切 縫補散衣 玳
- 16 筠溪牧齋集序云 自唐宋以來 浮屠氏文之善鳴者 独鐔津翁一人而已 云々 至於元善鳴者 盛稱
- 17 三隱 曰天隱 曰咲隱 曰覺隱 雖三隱並名 而居最者天隱耳

云々 蘇州府磧沙寺僧嗣詵 以天隱筠溪牧

18 潛集板刻不存 欲載錢梓以永其傳 來徵余序于卷端 云々 詵

長州人 灵谷幻居和弟子 出世鎮江「和」「弟」間に挿入符あり、
右傍に「尚」「和尚」にすべき。」

19 丹陽縣之幸感云 永樂十四年 歲在丙申 夏四月十有三日 逃

虛老人吳郡姚廣孝^ノ

20 永樂十五年 陳愷作天隱所注序云 高安沙門圓至上人号天隱

者 乃宋進士姚江村之弟也 以儒家

21 之彦 為釈氏之英 砺志苦學 貴從事華業 既而棄去 年十九

出家 蓋欲絶世累 託浮圖而逃者也 □末「浮圖」は「浮屠」

の誤植か」

22 之南渡後 僧之能文者 無踰二隱 曰天隱 曰咲隱 曰覺隱之

文 惟天隱為最 其有筠溪牧潛集 上

七五

1 与唐二体■詩注並傳之「註」見せ消

2 圓至字天隱 嗣雪岩欽 々嗣無准範 至元貞元間 住建昌能仁

寺 有筠溪牧潛集行于世 筠溪乃筠州高安也「寺」「有」間に挿

入符あり、右傍に「續傳灯五 有名無傳」とある。」

3 独卷讀至天隱文集云 余少為浮屠 而嗜於文 云々 得其正者

惟宋之鐔津 元之天隱也 天隱文姿性

4 元爽 問字深著也 故其作也 剔心鏤肝 敦章琢句 力欲削去

陳腐 而不背馳於作者之徑

5 断江獨■卷之一 讀至天隱牧潛集云 牧潛底用追潛子 蟠蘭椿

輪如大龍 向來力疾着書処 山鬼號咷石耳峯「疾」左傍に「仕

几切 待之玉」とある「咷」右傍より書入れ指示あり、「夕

ウ」とある。「こ」より原典にある方回序「易可窺測者也」から

「紫陽山虛叟方回序」が写されている」

6 沙門 梵云 沙迦■「滿」見せ消

7 滿囊 門字上

8 聲呼之 唐言勤

9 息 勤修善品 息

10 諸惡故 又秦訳勤

11 行 勤修善法 行

12 趣涅槃也 或云 沙門

13 那 或云葉門

14 沙門 或云葉門門字上

15 此云功勞 言修道有

16 多勞也 什師云 出家

17 者皆名沙門 肇云

18 出家之都名也 或以

19 沙門 翻勤息 垂枯

20 記云 謂勤行衆善

止息諸惡

22 華本 近高安「幻謂」近字又從——又字 嚮所謂近世永嘉 云

々 又有 云々等 關鍵也

七六

1 未易窺測 東方朔傳 以管窺天 以蠡測海

賢玄成傳贊 班彪曰 古今異「レ」制 各為

幻又按 漢書

- 2 「レ」一^ツ家 未易^{クニヤス} 可偏定^二也 云々 文法近焉
- 3 大魁 旧抄云 冠天下也 幻按 事文類聚前集四十六卷云 王宣徽拱辰 江端明 應辰 皆年十八作大魁 又
- 4 按方輿勝覽五十二 簡州部云 四出大魁 注 図経云 王鼎璞偽蜀時狀元 皇朝許將張孝祥及許
- 5 奕 云々 皆此邦之人 云々 幻謂 大魁即狀元及第也 又事文類聚後集十四 女識大魁之題下 載李翱
- 6 女識進慮儲必為狀元頭也 又湖海新聞第十載文天祥作狀元事云 兩年果大魁天下
- 7 天隱翁溪牧潛集序云 天隱季父癸丑廷魁 姚公勉父文叔 兄雲皆前進士 吳門磧砂魁上人偕其友
- 8 清表 將以其文梓行 魁皆吳妙高元 善遊於天隱 而余亦遊之云 三年己亥十月初九日丙辰【二亦一見世消】
- 9 紫陽万回万里序
- 10 大魁 事文類聚 科目曰狀元及第謂之大魁 又曰廷魁 曰殿魁
- 11 姚公勉 排韵 姚勉号雪坡 瑞陽人 宋宝祐中 狀元及第 云々 除太子舍人 与吳仲雲 刘元高 黄夢炎 号
- 12 錦江四俊 俊皆頭官 理宗宝祐元年 上試進士 賜姚勉以下及弟出身在羞 養考之
- 13 猶子 礼記 兄弟子猶子也
- 14 姚公勉 案江湖紀聞三云 瑞州姚勉 其母微賤 正母不奉棄之野 時大雪 越一日有過者 尚口児【米十耳】(聞)
- 15 啼 父方怪而育之 後以宝祐癸丑 大魁天下 姚後号雪坡 不忘本也

- 16 禪熟 牧潛集 洪喬祖跋云 憫世之宗師 嘗出沒儒釈 而更為之化導 儒釋釈而文 其揆一也
- 17 牧潛集 初改黄衣詩云 宣詔亭前受隱迹 御黄新賜滿城看 臣僧記取沙弥日 齊着青衣
- 18 上戒壇
- 19 一山魁上人 行魁 字一山 嗣高峯妙 盖中峯法弟也 行魁自号枯木道人 雪本
- 20 山菴雜錄云 天目居山 有魁一山者 蘇州人 博學多才 与天童平石翁交甚密 當叢林全盛時 人
- 21 皆翕々求進 魁独栖遲於岩谷 不与世接 有石大梅 懶瓚之風也 云々 雪本
- 22 磧砂 吳門陳湖有磧砂 額曰延聖寺 雪
- 七七
- 1 天隱文集序云 吳門磧砂魁上人偕其友清表 將以其文梓 云々 又文集有寄南峰表上人詩曰【行頭右傍に書入れ 雪本】
- 2 自別陳湖寺 清朋絶勝遊 又書近文 与南峰表上人願其後曰 余客游磧砂所遇無旧 而表
- 3 上人願余独厚 云々
- 4 陳惺序云 天隱帰寂 表上人既為刻之於前 今嗣説上人復為刻之於後 心灯之續不味固如是
- 5 哉 又陳建序云 元至大中磧砂寺表上人始板行之 後僧嗣説復重刻之 云々 表也 袁字非也 雪本
- 6 案 龍舒居士王日休浄土文云 紫陽處谷居士方刺君 云々 雪本

- 7 山〔補綴〕天目居士有魁一山者 蘇州人 博學多才 与天童平石翁交甚密 當叢林全盛時 人皆翕々〔行頭右傍に書入れ幻本〕
- 8 求進 魁〔強〕樓〔強〕遷於岩谷 有古大梅樹擢之風 独許山下樓越洪家府諸子弟〔強〕來 既終 洪氏夢魁乘一〔樓〕見 せ消
- 9 山橋 至其家 次日産一子 名應魁 字士元 自幼入學 至娶妻育子 絶無前生趣味 年三十 忽自猛省
- 10 尽寥平日所為 与一僧明維那者 結屋東天目山絶頂 習禪定 至若燒〔強〕食 皆躬為之 雖老於頭陀〔強〕余田
- 11 者 有所不如 正至丁酉 猫獠燒劫徑山 余奔抵其所 士元肅容 礼度和雅 荅對從容 徐問其故 乃知〔強〕如〔強〕正〔強〕間に挿入符あり、至〔強〕右傍に転倒符ある。至正丁酉にすべき。
- 12 魁後身也 因謂之曰 公前身与天童平石翁為莫逆交 今公年垂九十 耳目聰明 公〔強〕蓋作偈寄之〔強〕蓋 見せ消
- 13 庶見一夢兩覺 而夢覺一如乎 士元乃作偈曰 寄語天童老平石 一念非今亦非昔 欲聽楓橋半
- 14 夜鐘 吳江依旧連天碧 偈未及到 翁已不寂
- 15 石林和尚偈頌拾遺 送僧上天目見魁首座 落句云 君不見紫垣道人天目山 垢衣〔強〕窓烟雲間 調高一曲無〔強〕〔七字〕
- 16 人委 見說髮長過兩耳
- 17 龍岩竹居集 寄天目魁首座云 枯木中魁首座 自言嫌仏不肯做 寒山詩作數十篇 龍牙頌吟一两个 云々
- 18 牧潛集 荅魁首座書云 紫垣足下 辱書無不達 然失於答者 所居僻絕使然 非於故旧有所忘也 寄示詩文 皆 清廉雅正 能使識者數服 何幸見足下之進 僕願慊矣 然足下之成本其質之妙 非僕〔強〕々能有以發
- 20 足下 而足下推其所自 必鼎德於僕 無其功而冒其奉 使僕受之其色赧然
- 21 行魁 字一山 嗣天目高峯 天隱為一山師叔也
- 22 磧砂 幻本 袁字改作表字可也 清表上人魁上人事見天隱文集 旧抄云 天隱寄南峯表上詩曰 自別陳湖寺〔表上詩〕、上〔強〕詩 間に挿入符あり、右傍に「入」「表上人詩」にすべき。
- 23 清朋絶勝遊 林中無半夏 江上見孤船舟 夜夢思山泣 寒禪過雪脩 知君詩思若 天際下明陽 幻按 此詩在「若右傍に「苦」とある」
- 七八
- 1 牧潛集第七張 蓋牧潛集無卷數 旧抄 吳興陳湖有磧砂乃菴其上 中流之鎮 額曰正聖院 見天隱文集也〔強〕番 見せ消
- 2 將磧砂 牧潛集 書近文与南峯表上人因題其後云 余客游磧砂所遇無旧 而表上人顧余独厚 嗜〔強〕某字墨消の上に「近」を重書 見せ消
- 3 好亦与人同 余無以為 上人驢乃書近文數言為笑樂 南峯表所居乎 又表号乎 以文勢推之 恐表号乎
- 4 牧潛集不載磧砂有南峰 魁上人 表公方回皆同遊之人也 方回字万里 作碧〔強〕序
- 5 村云 回 万里 元朝人也 号虚叟居士 又作碧〔強〕序云 其徒有翻案法 呵佛罵祖 無所不為 間有深得吾詩
- 6 家話法者 云々 大德四年庚子四月初八日 癸丑紫陽山方回萬里序
- 7 養按 王應麟 玉海之末 有小学紺珠十卷 方回製其序 云大

- 徳康子紫陽院字方回序 幻謂 庚子 大徳四年也
 8 幻謂 称紫陽虚叟 故尊朱文公平
 9 牧潜集跋云 己亥之冬 余往天目西峯忽觀天隱禪師文集一卷
 而虚叟方公叙其前 云々 虚叟見天隱之文於道
 10 余見天隱之道於文 同邪異敷 天者不可隱也 大徳二年天目雲
 松子洪喬祖拜手敬跋 由是觀之 虚叟乃虚
 11 谷叟也 何仲徳詩林万選第三 虚谷方回搜春詩 應俗身全懶
 搜春意欲迷 蝶隨風捲絮 燕喜洞添
 12 泥 省事戸稀出 饒人基放低 云々 第四詩夜詩 意行春得句
 影語夜成篇 一字未知律 五更終不眠 云々
 13 以弁其端 村云 弁冠弁也 冠其端之義也
 14 紫陽山——古本云 大徳九年乙巳 九月初六日 紫陽山虚叟方
 回序 天隱箋注本亦有大徳以下十一字
 15 幻謂 此本刪去年号日月者 何哉 至大二年在 大徳九年在
 後 則不倫之謬昭々 故刪去焉耶 未必尔 【至大】 右傍に「大
 徳第一主 至大第二主」とある
 16 平 幻謂 大徳 元朝第二主成宗年号也 季昌序云 至大二年
 云々 至大元朝第三主武宗年号也 又按
 17 元史 大徳十末十一年 正月癸酉 成宗崩 同年夏五月 武宗
 即位 明年戊申 改元曰至大 盖自大徳九年
 18 至至大二年己酉 相隔五年也 然則虚叟作序 在【二季昌作注
 之前【一】 今本季昌在前 虚叟在後 恐鑿
 19 梓者誤乎 或云 陸季昌置干虚叟之上者 俾人早知三体之可用
 作注之来由也 又先【二乗章【一】 後貞鼎
 20 之謂乎
- 21 幻又按 鈔溪牧潜集方回序云 天隱文集若干卷 非特南渡後僧
 無之 渡南後士大夫亦未辨至此也【渡 右上に挿入符あり、「南
 右傍に転倒符ある。「南渡後」にすべき。】
 22 然予惜其不專於儒也 咸淳甲戌 年十九出家 依仰山慧朗大師
 欽公脱髮 云々 至元貞間 住建昌能仁
 七九
 1 寺 其說法亦稟於欽 不兩年棄去 大徳二年戊戌卒于廬山 年
 四十三云々 由是觀之 此序天隱戰化之
 2 後八年也 牧潜集序者 天隱戰化之明年也 天隱注三体者在昌
 前可知矣
 3 桃抄云 汝陽 周弼 伯明選 伯明ハ 汝陽人 宋末詩人
 元朝始世宗時マテ 有リ 宋南渡【3行目から9行目は異筆で、
 原紙の余白に貼り紙されたものと見える。】
 4 後ノ詩人也 金ノ詩人中ニモ 有此人名也 名人也 中興江湖
 集三有詩 小傳ヲ載タシ
 5 高安秋園至天隱註 天隱ハ欽雷君ノ弟子 无準ノ孫弟子 續傳
 幻第五卷 雪石法
 6 嗣有名無傳 葵山天隱圓至禪師ト アルソ 禪熟文□ト 序ニ
 モ 云タ人ソ【□「孰」ハ（熟）】
 7 裴季昌ハ 元ノ武宗ノ時ノ人也 古本ニハ 二番メニアリ 集
 註トシタソ 天隱ヲハ 三番メニシテ
 8 下ニ増註ト シタハ ナントシタ事ソ
 9 幻曰 釈トハ 弥天釈 道安ト 云カラソ 釈氏ト云也 僧ハ
 【二俗姓【一ト云コトニ ヨツテ 不レ分【二貴賤【一ソ

八〇

1 幻曰 風抄 梅謂 汶陽周弼 宋理宗淳祐十年庚戌秋八月 選此集 當日本後深草院建長二年 幻

2 未考出処

3 華本 大明弘治戊午之歲 鼎朝之使 所持来 三休詩 乃至天

隱箋注 分為二十一卷者也 各分二休

4 為一卷 蓋一卷實接 一卷虛接 云々 綱目題号云 新刊箋註

唐賢絶句三休詩綱目 云々 又外題云

5 箋註唐賢絶句三休詩 又第一卷題号云 新刊唐賢絶句三休詩卷

之一 云々 二十一卷 皆如此 八句亦

6 云絶句 可怪焉

7 養按 古本外題曰 諸家集註唐詩三體家法卷之一

汶陽 周弼 伯弼 編選

東嘉 裴庾季昌 集註

高安 釋圓至天隱 增註

8 幻曰 增註ハ 季昌力 增註ソ

9 迺見去声 紙句 進字注 移尔切 邪行 亦作進也 又麗進

連接也 又支句 迺余支切 歌句 唐何切 逶迤 行貌 〔迺〕

字は四七 8 〔演〕迺於卿臺南風之歌 に見える 〔以下八一頁よ

り〕卷之一 についての抄文が続く

〔異体字一覽〕(一)に通行体を入れた。なお、〔一〕において*印と*印で記すものを掲げない。また、操作困難なため、一部ユニコードには文字がないものも割愛した。

目 因 韵・勻 韻 云 雲 繪 繪 淵 淵 鈐 鈐

往 往 蓋 蓋 畫 画 还 還 氣 氣 京 京
 畊 畊 藝 藝 縣 県 號 号 國 国 雜 雜
 參 參 尔 爾 實 実 粹 粹 虽 雖 聲 声
 舩 船 昔 昔 曾 曾 續 続 佗 他 臺 台 但 但
 荅 答 當 当 黨 党 廢 廢 發 発 范 範
 弼 弼 席 席 廟 廟 劉 劉 畧 略 灵 靈
 派 流 廿 二十 卅 三十 烏 乎 嗚 呼

〔付記〕本稿は二〇一一年度中華人民共和國教育部人文社会科学一般項目(規劃基金項目11YJA751047)「日本五山僧的抄物『三体詩幻雲抄』中漢籍征引狀況与室町時代的漢籍流布研究」の研究成果の一部とする。

リュウレイノ北京師範大学外国語文学学院 副教授
 (二〇一二年十二月三日 受理)